

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第25輯

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線(府道磯之上山直線)建設に伴う

上フジ遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 8

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第25輯

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線(府道磯之上山直線)建設に伴う

うわ 上フジ遺跡

—— 発掘調査報告書 ——



1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



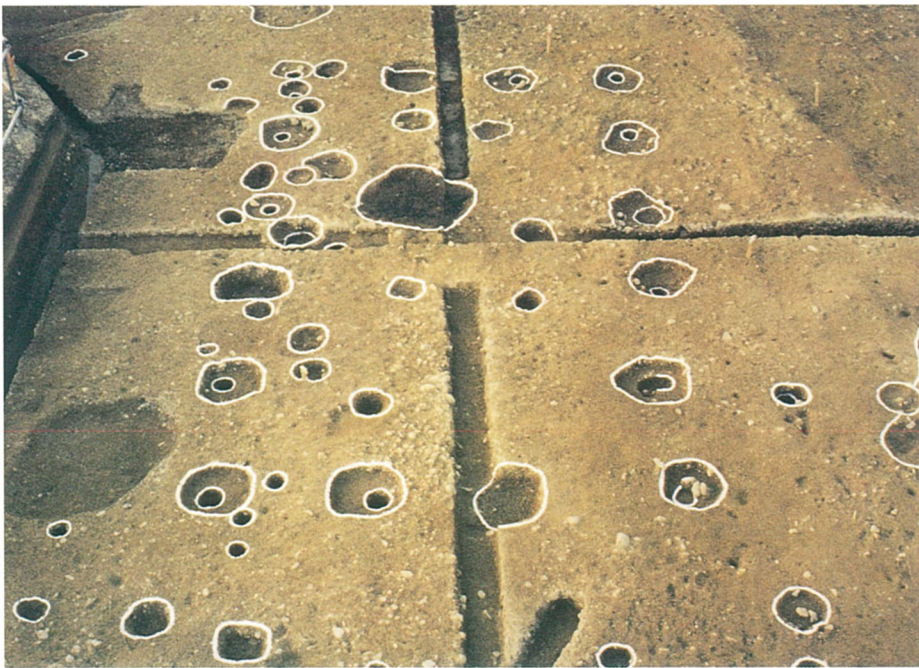
(上空より海岸平野を望む)



(上空より牛滝谷を望む)



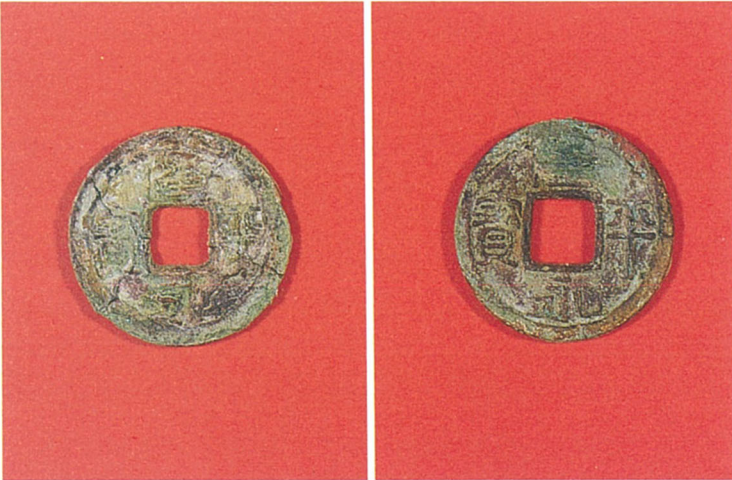
第I調査区全景（西から）



奈良時代掘立柱建物409



石器（先土器・縄紋時代）



古銭（隆平永寶）

序 文

岸和田市の南東部を北に流れる牛滝川に沿った谷合は山直谷と呼ばれ、古い郷名と条里地割りを残していることで注目を集めてきた地域です。関西国際空港の建設にともなう地域整備計画の一環として、この谷を縦断するように主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線の道路建設が進められ、財団法人大阪府埋蔵文化財協会では道路建設部分にある埋蔵文化財の発掘調査を昭和60年度から担当してまいりました。

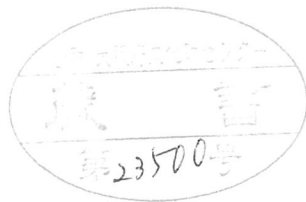
ここに報告いたします上フジ遺跡は、山直谷のほぼ中央にあり、北側に古墳時代のムラを中心とした三田遺跡、南側には飛鳥時代から奈良時代にかけてのムラである二俣池北遺跡が続いています。上フジ遺跡では古墳時代から奈良時代にかけての住居跡や溝が見つかっています。中世にも建物群などがあって散村的な集落があったようです。また山直谷の条里地割りに合う位置にL字形に曲がる大きな溝も発掘されています。この溝は砂の堆積のようすから何度か開削が繰り返され、長期にわたって水が流れていたことがわかりました。今回の調査成果が当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝をしております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和63年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄



例 言

- 1 本書は、府道岸和田・牛滝山・貝塚線（都市計画道路磯之上山直線）建設予定地内の岸和田市三田町に所在する上フジ遺跡^{うわ}の昭和61年度計画分の発掘調査報告書である。62年度の北半部・藤池地区・擁壁部分の調査についても併せて記載した。
- 2 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課の指導に基づいて、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
- 3 調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第3班が主に担当し、班長渡邊昌宏・技師森井貞雄・同田中一廣・同虎間英喜・第2班同西村 歩が現地調査にあたった。本調査は昭和61年11月14日に準備工に着手し、昭和62年3月31日まで、及び昭和62年5月18日より7月31日までの2年度にわたって実施した。尚、各調査の担当と日程については、第Ⅲ章第2節「調査の経過」に記した。
- 4 整理作業並びに報告書作成作業は、田中・虎間が進め、昭和61年度分も含めて昭和62年12月25日まで実施した。
- 5 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課・大阪府土木部岸和田土木事務所・岸和田市教育委員会・および地元関係者各位の協力を得た。
- 6 現地調査及び整理作業にあたっては、大阪府教育委員会をはじめ・近藤利由（岸和田市教育委員会）・西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）のほか当協会職員各氏の御教示を受けた。記して感謝します。
- 7 遺構写真撮影は各担当者によるが、航空写真・測量は写測エンジニア株式会社に委託した。写真の焼付け・遺物写真は、資料係、小森和夫が担当した。
- 8 本書の原稿執筆は、各担当で分担した。図版の作成は、Ⅰ調査区・写真図版・その他を田中、Ⅱ・Ⅲ調査区を虎間が行った。
- 9 本書の編集は各担当と調整して田中があたり、資料係が編集調整を行った。
- 10 出土遺物・作成した図版・写真などの記録は、資料係で保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

- 1 本書の遺構実測図・文中に用いた方位のNは、国土座標第VI系の座標北を示す。真北方向へは $0^{\circ}19'$ 東へ、磁北は $6^{\circ}20'$ 西へ振る位置関係にある。なお、座標値はすべてkmを省略した。
- 2 標高はT.P.（東京湾標準潮位）で表示したがT.P.およびmを省略して記述した。
- 3 本調査における遺構実測は、航空測量により図化作業を実施し、全体図1/100、平面図1/20、遺構図1/20を作成した。本書はそれを原図として図版を作成した。
- 4 本書の遺構全体図は1/200、土層図・遺構図は1/20・1/30・1/40・1/50を基本とする。
- 5 本書の遺物実測図の縮小率は、土器・土製品1/4、石器2/3に統一した。また、遺物挿図番号と図版の遺物番号は対応する。写真は縮尺を統一していない。
- 6 図化した土器は土器の種類によってそれぞれ断面を須恵器・陶磁器は黒く塗りつぶし、瓦・瓦質土器は斜線、土師器・瓦器は網目、その他は白抜きで示した。
- 7 本書に示した遺跡の地区割りについては、新版大阪府都市計画図（1/2500）を基にした本協会独自の地区割り呼称と、現地で設定した調査区名を併用している。具体的には第III章「調査の方法」で記す。
- 8 遺構及び遺構番号はすべて協会独自の呼称方法をとるが、表現については日本語で併用して表記した。建物については混同を避けるために建物を構成する柱穴番号の内代表するものを建物番号とした。
- 9 本書に掲載した遺跡分布図・位置図は、国土地理院発行の1/2500地形図（昭和24年・58年版）を使用した。
- 10 本書で用いた色調の表現は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』5版 1976年、による色片との比較で記載している。
- 11 本文中で「先土器」「縄紋」「土坑」「杯」「碗」「址」という語句については、担当者間で統一したが、その他、担当者の強い意向によるものは統一をしていない。

本文目次

第I章 調査に至る経過	1
第II章 上フジ遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
第III章 調査の方法と経過	5
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の経過	8
1 61年度調査	8
2 62年度調査	9
第IV章 調査の成果	10
第1節 層序と包含層の遺物	10
1 基本層序	10
2 包含層と出土遺物	14
第2節 遺構と遺物	28
1 古墳時代以前	28
2 古墳時代～奈良・平安時代	38
3 鎌倉～室町時代	77
第V章 藤池地区の調査	82
第1節 池内の調査	82
第2節 池堤防の調査	84
第3節 小結	85
第VI章 総括	86
第VII章 附論	91
上フジ遺跡花粉化石等微化石分析	91
川崎地質株式会社	

挿 図 目 次

第1図	上フジ遺跡の位置図	2
第2図	岸和田周辺の地形図	3
第3図	上フジ遺跡と調査地位置図	5
第4図	大阪府1/2500地形図図郭割と地区割要領	6
第5図	調査区割付図	7
第6図	調査地西壁縦断面土層図	11～12
第7図	調査地横断面土層図	13
第8図	I調査区第II層出土遺物実測図	14
第9図	I調査区第II(IIa)～III(IIIc)層出土遺物実測図	15
第10図	I調査区第III～IV層出土遺物実測図	16
第11図	I調査区第IV層出土遺物実測図	17
第12図	I調査区IV層E18BL地点出土古銭	18
第13図	I調査区第IV(IVa～IVc整地層)層出土遺物実測図	19
第14図	II・III調査区第II～III層出土遺物実測図(1)	21
第15図	II・III調査区第II～III層出土遺物実測図(2)	22
第16図	石器出土地点の分布図	24
第17図	I～III調査区出土石器実測図(1)	25
第18図	I～III調査区出土石器実測図(2)	26
第19図	調査風景点描	27
第20図	上フジ遺跡遺構全体図	29～30
第21図	上フジ遺跡遺構配置図	31～32
第22図	土坑608・610・635・587・586・596・620・630・591平面・断面図	34
第23図	土坑592・598・602・605・613・619・671・585・577・584 平面・断面図	35
第24図	土坑589・590・582・583・601・607・631・657平面・断面図	37
第25図	竪穴住居跡1116竈平面・断面図、出土遺物実測図	38
第26図	竪穴住居跡290平面・断面図	39
第27図	竪穴住居跡290竈平面・断面図、出土遺物実測図	40
第28図	竪穴住居跡473平面図	41

第29図	竪穴住居跡473・168出土遺物実測図	42
第30図	竪穴住居跡168平面・断面図	42
第31図	竪穴住居跡168竈平面・断面図	43
第32図	竪穴住居跡291・393平面・断面図	44
第33図	竪穴住居跡393・291出土遺物実測図	45
第34図	竪穴住居跡300平面図	45
第35図	竪穴住居跡365平面・断面図	46
第36図	竪穴住居跡300・365出土遺物実測図	46
第37図	掘立柱建物172平面・断面図	48
第38図	掘立柱建物210平面・断面図	49
第39図	掘立柱建物409平面・断面図	50
第40図	掘立柱建物1102平面・断面図	51
第41図	Ⅱ調査区柱穴平面・断面図	53
第42図	柵650・573平面・断面図	55
第43図	土坑1140平面・断面図、出土遺物実測図	56
第44図	土坑1132平面・断面図	56
第45図	土坑1132出土遺物実測図	57
第46図	土坑1124平面・断面図	57
第47図	土坑1124出土遺物実測図	58
第48図	土坑315・395・376・394・401平面・断面図	59
第49図	土坑315・395・376・401出土遺物実測図	60
第50図	流路562平面・断面図	62
第51図	流路562出土遺物実測図	63
第52図	溝13出土遺物実測図	63
第53図	溝12平面・断面図	64
第54図	溝12出土遺物実測図	65
第55図	溝4断面図	67
第56図	溝4出土遺物実測図	68
第57図	落込み499他出土遺物実測図	69
第58図	溝500平面・断面図	71

第59図	溝500出土遺物実測図（1）	73
第60図	溝500出土遺物実測図（2）	74
第61図	溝563平面・断面図	76
第62図	土坑63平面・断面図	77
第63図	土坑63出土遺物実測図	77
第64図	土坑10平面・断面図	78
第65図	土坑10出土遺物実測図	79
第66図	柵列505・501平面・断面図	80
第67図	藤池調査地トレンチ位置図	82
第68図	藤池内流路1・2、溝1断面図	83
第69図	藤池地区出土遺物	84
第70図	藤池堤防横断面図	84
第71図	採取地点と採取土層断面	92
第72図	花粉・珪藻ダイヤグラム（1）	99
第73図	花粉・珪藻ダイヤグラム（2）	100
第74図	花粉化石顕微鏡写真	103
第75図	珪藻化石顕微鏡写真	104

表 目 次

第1表	分析処理検出数・数量表	91
第2表	花粉分析処理フローチャート	93

図版目次

- 卷頭図版一 上フジ遺跡と周辺
卷頭図版二 調査地全景・奈良時代掘立柱建物跡
卷頭図版三 石器・古銭

- 図版一 上フジ遺跡周辺航空写真
図版二 上フジ遺跡全景
図版三 上フジ遺跡調査区各全景
図版四 第Ⅰ調査区全景
図版五 第Ⅱ調査区全景
図版六 第Ⅲ調査区全景
図版七 竪穴住居跡290
図版八 竪穴住居跡290・291・393土器出土状態
図版九 竪穴住居跡291・393
図版十 竪穴住居跡365・300
図版十一 竪穴住居跡168
図版十二 竪穴住居跡473
図版十三 掘立柱建物跡210・Ⅰ調査区柱穴群
図版十四 掘立柱建物跡409
図版十五 溝500・柵列
図版十六 溝4・12・落込み499・土坑497土層断面
図版十七 溝12・13・402・444、土器出土状態
図版十八 流路562全景、土層断面
図版十九 土坑315・395全景、395・376土器出土状態
図版二〇 土坑376・394・470・476・468全景、468土層断面
図版二一 土坑10・11・497・641
図版二二 土坑63
図版二三 擁壁1・2次調査検出遺構
図版二四 藤池地区(1)

- 図版二五 藤池地区（2）
- 図版二六 包含層出土先土器・縄紋時代遺物（1）
- 図版二七 包含層出土先土器・縄紋時代遺物（2）
- 図版二八 包含層出土古墳時代遺物
- 図版二九 包含層出土奈良・平安時代遺物
- 図版三〇 竪穴住居跡1116・290・168・土坑315・366・376出土遺物
- 図版三一 土坑395・1132出土遺物
- 図版三二 溝4・落込み499出土遺物（1）
- 図版三三 溝4・落込み499出土遺物（2）
- 図版三四 溝4・落込み499・Ⅳ層出土遺物（3）
- 図版三五 溝402・1124・12出土遺物
- 図版三六 溝12出土遺物
- 図版三七 溝13・500出土遺物
- 図版三八 土坑63・10・溝4出土遺物

第 I 章 調査に至る経過

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線は岸和田市磯ノ上地区から南進して大阪外環状線積川地区をつなぎ、貝塚市の臨海地区へ戻って来る府道である。泉佐野沖に開港される関西国際空港建設関連事業として道路建設が進められている。本線については昭和58年に大阪府教育委員会によって分布調査が行われ、路線上に多くの遺跡が確認された。昭和59年度には路線内の数箇所での試掘調査の他に今木廃寺遺跡で発掘調査が行われている^①。昭和60年度からは本線の調査について、大阪府教育委員会の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が担当することになり、60年度は三田遺跡、箕土路遺跡の発掘調査、61年度は西大路遺跡、山ノ内遺跡、山直北遺跡などの発掘調査を実施した。

上フジ遺跡については大阪府教育委員会の指示に基づき、昭和61年10月、大阪府土木部と当協会は上フジ遺跡の調査に関する委託契約を交わし、まず遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施した。その結果、対象となる地区の全面にわたって遺跡の広がることが確認され、11月から61年度分の本格的な発掘調査を実施することになった。

62年度は4月に、路線にかかる藤池堤防部分の調査を行った後、61年度未調査の地区および新たに用地の確保ができた地区について7月まで調査を実施した。その後道路建設にともなって、境界地の擁壁部分について、遺構面の保存の不可能な部分を中心に発掘調査を2次にわたって行い、62年10月上フジ遺跡に関する発掘調査を終了した。(田中)

註

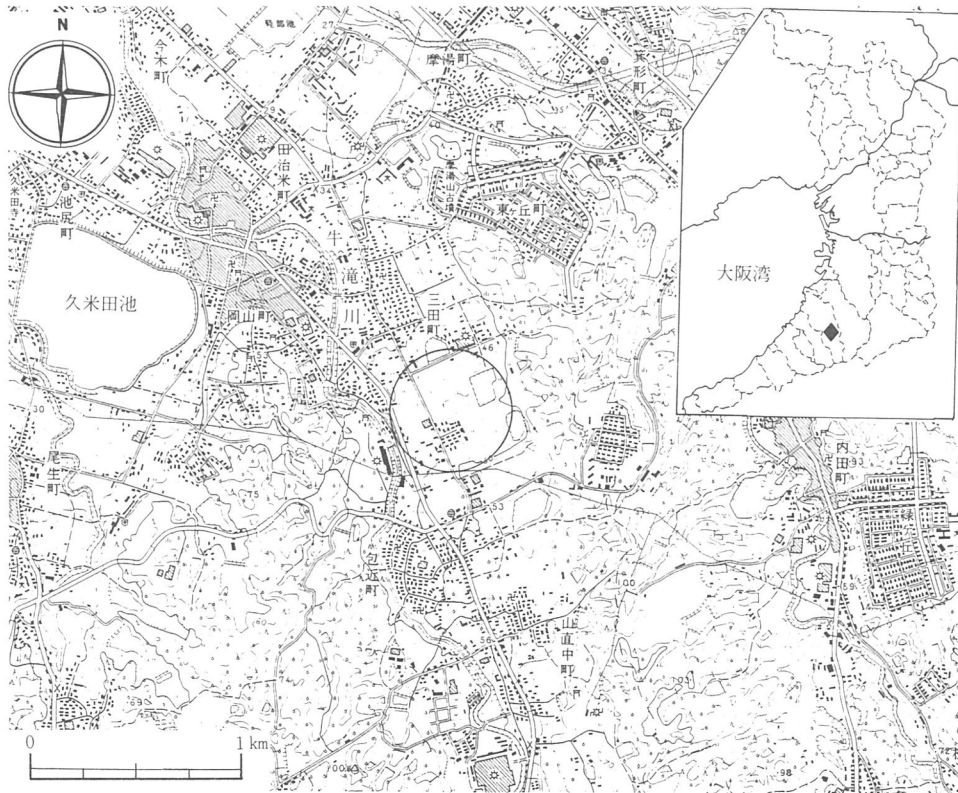
- ① 小山田宏一『三田遺跡試掘調査概要』 大阪府教育委員会 昭和60年3月
岡本敏行『今木廃寺遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会 昭和60年3月
他に大阪府教育委員会から軽部池西遺跡、西大路遺跡、箕土路遺跡についても試掘調査概要が報じられている。

第II章 上フジ遺跡の立地と環境

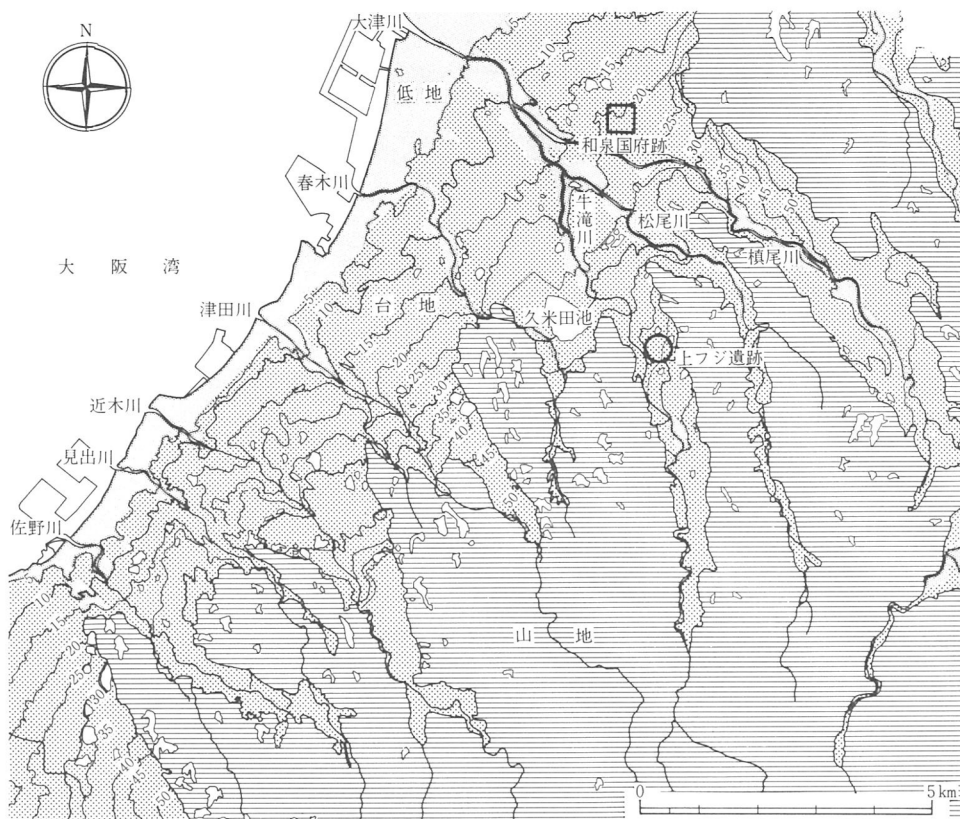
第1節 地理的環境（第1～2図、図版一）

上フジ遺跡は大阪府岸和田市三田町上フジ他に所在している。昭和58年の大阪府教育委員会の分布調査によって確認された。遺跡の範囲は南北約430m、東西約200mにおよぶ。上フジ遺跡の所在する岸和田市は大阪府の南西部に位置し、北は大阪湾を臨み南は和歌山県とを境する和泉山脈にとどく、南北17.3km、東西7.5kmの細長い市域を有している。海岸部は岸和田城下を中心に早くより市街地化されているが、周辺部は徐々に人口が増し、開発が進行している状況にある。

地形的にみると、和泉地域は南北に延びる基盤山地の和泉山脈から張り出す丘陵と洪積段丘が発達している。洪積段丘が海岸付近まで広く発達し、段丘面を深く削り込んで中小



第1図 上フジ遺跡の位置図



第2図 岸和田周辺の地形図

の多くの河川が大阪湾に注いでいるため、沖積地は非常に狭く起伏に富み河川ごとにまとまった地形を成している。

上フジ遺跡のある谷筋は広く山直谷と呼ばれている。葛城山に源を発する牛滝川に開析された奥行き深い谷筋で、段丘面と牛滝川の氾濫原で平地部が構成されている。周辺の丘陵部から中世以前の浅い谷筋が牛滝川に向かって刻まれ、その多くは平地部で埋没谷となっているものの、その名残を示すように段丘上には各所に溜池が作られている。

遺跡は海岸部から約6 km奥に入った牛滝川右岸の段丘面上に立地している。標高は遺跡の北端でT.P.約44m、南端でT.P.約47mを測る。遺跡の現況は水田および畑であった。遺跡地周辺の基盤層は黄色粘土もしくは砂礫層からなり、現地表面下-0.5~-0.6mのところにある。

第2節 歴史的環境

上フジ遺跡が所在する岸和田市東南部は、古く『和名類聚抄』のいう「山直郷」「八木郷」で、これを南北に貫く形で建設が進んでいる主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線の事前調査が進むにつれ、今まで確認されていなかった先土器時代から近世にかけての豊富な遺構・遺物が多量に発見されている。

(財)大阪府埋蔵文化財協会では、9箇所の遺跡の発掘調査をこれまでに行っており、これにより山直谷の歴史的な様相が明らかになってきた。遺跡の分布状況等については、既刊の報告書との重複を避けることにするが、本書に関係する時代の遺跡としてはすぐ北側の丘陵先端部に泉州地域としては最大級の前方後円墳、摩湯山古墳があり、丘陵麓にある三田遺跡、山直北遺跡で古墳時代の竪穴住居跡群や掘立柱建物群などの集落や古墳が調査されている。これらの遺跡では大型の掘立柱建物などをとめない、山直谷の中でも中心的な地区であったことがうかがわれる。奈良時代から平安時代も山直北遺跡で緑釉陶器をとみなう大型の掘立柱建物などの、和泉国律令体制下の地元豪族層の居館と目されている遺構がみられ、山直郷の由縁足るべき様相の一端が明らかにされている。南接する二俣池北遺跡、水込遺跡等についても62年度の調査で古墳時代以降の集落が調査されており、山直谷の該期の遺跡の様子は急速に知られるようになってきている。

その内容については既刊の本協会の報告書およびこれから予定されている報告書を参照されたい。^① (田中)

註

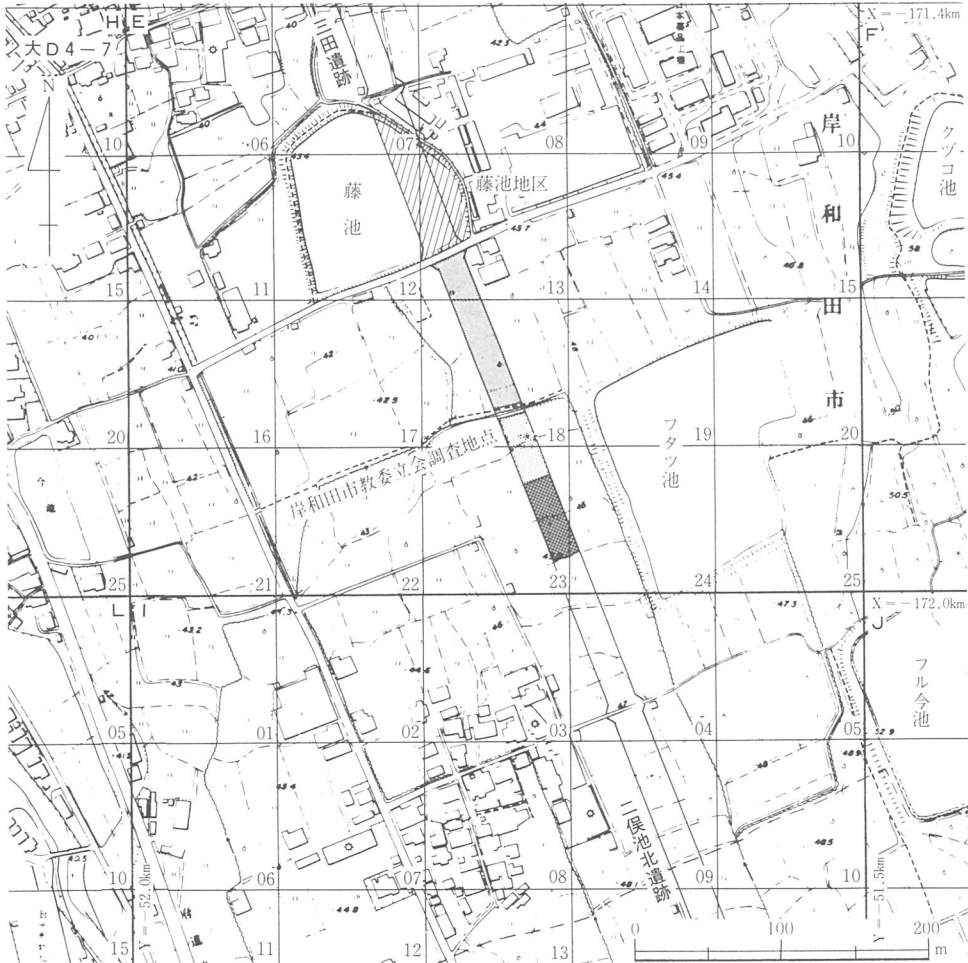
- ① これらの遺跡は昭和61年度、62年度の本協会の発掘調査成果による。既刊の報告書としては岩崎二郎、渡邊昌宏他 『三田遺跡発掘調査報告書』『大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第15輯』 1987などがあり、山直北遺跡、二俣池北遺跡等については報告書作成中あるいは調査中の成果である。

第Ⅲ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法（第3～5図）

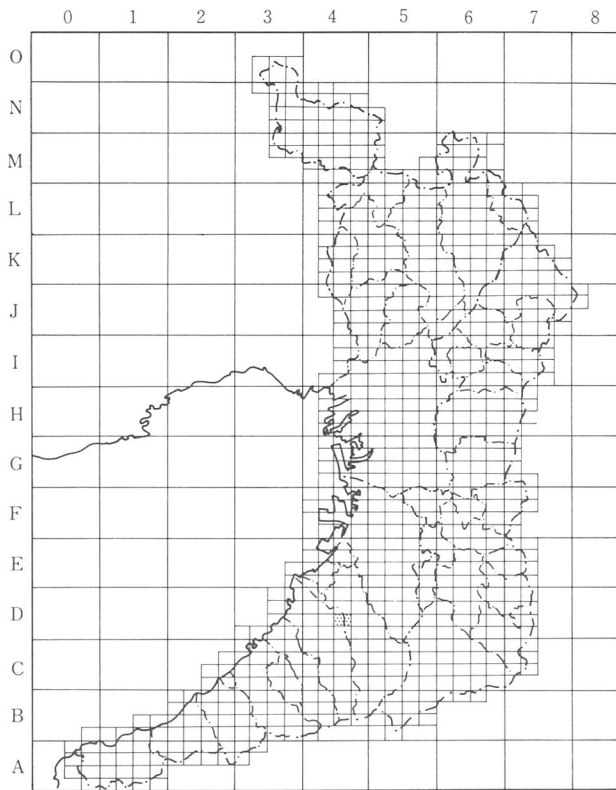
調査地結果について次節以後で詳しく述べるが、地形的な特徴と調査工程の関係から調査地を四区分し、北からⅠ～Ⅳ区と仮称した。本書にもこの呼称を採用している。

遺跡の位置・調査区内の地区割を示すに当たっては協会で定めた呼称法によっている。これは国土調査基本法に基づく新平面直角座標第Ⅵ系（昭和43年建設省告示第三〇五八号）を使用し、大阪府発行の新版2500分の1の都市計画地形図を基本として4×4mの方形区



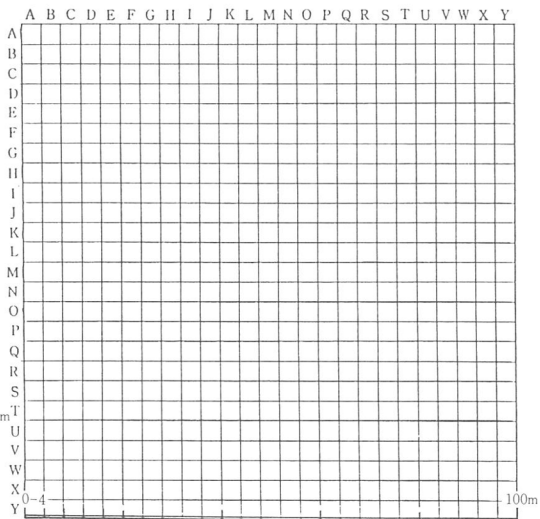
第3図 上フジ遺跡と調査地位置図

画割をおこなうもので、大阪府下全域をカバーしている。地点名称や遺物取り上げ発掘調査上の地区別の最小単位を示すものである。地区割の呼称方法は、新版の大阪府都市計画地形図の横軸－X軸・縦軸－Y軸（縦軸は座標北を示す）を使用し、地形図を12等分している500×500mの区画をAからLのアルファベットで呼び、さらに、この区画を25分割した100×100mの区画を2桁の01～25までの数字で示す。この100mの区画を縦横それぞれ25等分して4×4mの区画を作り、



大D-4-7 (地図表題)

A	B	C	D
E	F	01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25	01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
I	J	K	L



第4図 大阪府1/2500地形図図郭割と地区割要領

縦方向を先に、横方向を後にして、行列をアルファベットで呼称する。以上の5桁の記号で地区割を示す。遺物の取り上げ、実測作業はこの地区割のX・Y軸を基軸線として行った。なお今回の調査対象地は都市計画図大D-4-7 E07・12・13・18・23に該当する。

X・Y座標の設定は3級・4級基準点測量を基に行い、高さはT.P.を用いている。

遺構の呼称についても協会の定めた呼び方を採用している。本書に關係する記号は以下に列記する。

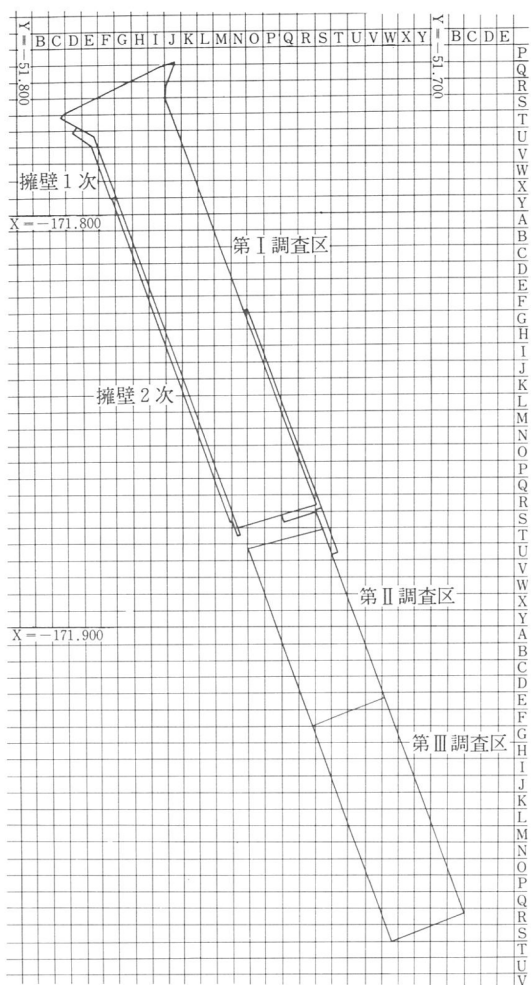
- | | |
|----------|----------|
| OB:掘立柱建物 | OD:竪穴住居跡 |
| OF:柵列 | OH:炉・竈 |
| OO:土坑 | OP:ピット |
| OR:河川 | OS:溝 |
| OZ:水田・畑 | OX:その他 |

発掘作業は表土層を機械掘削した後、それより下位を人力掘削によって実施した。

遺構の全体図は、航空測量による図化作業(1/20・1/100)を行った。その他の図面は、全体土層図(1/20)、遺構土層図(1/10)、遺物出土状況図(1/10・1/5)を作成した。

写真撮影は全景・遺構・土層断面等6×7モノクロ・35mmモノクロと並行してカラーズライドで行った。

出土遺物は地区・層位ごとに分類し、洗浄・注記・接合・復元を行った後、代表的な遺物を選別して実測・写真撮影を行い本書に掲載した。(田中)



第5図 調査区割付図

第2節 調査の経過

上フジ遺跡の調査は第Ⅰ～Ⅳ区の本調査以外にいくつかの小規模な調査を経ている。それぞれの調査の経過は以下に述べる通りである。

61年度調査

大阪府土木部の委託を受けて財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課は10月、まず試掘調査の準備に着手した。現地調査は調査課第3班が担当し、技師小山田宏一、同宮崎泰史が10月15日より30日までの日程で試掘調査を行った。試掘調査は遺構の広がり、密度の把握を主な目的とし、本調査になった場合にもできるだけ支障を来さないように、調査対象地の東西の端に沿って幅1mを基本とするトレンチを設けた。包含層の掘り下げは人力掘削によって行った。

その結果、第3班班長渡邊、技師田中が全面的な調査を担当することになり、11月14日からⅠ区全長120mの準備工に着手した。11月20日、現代耕作土を除去するために北側から機械掘削を開始し、雨天のために延びたものの同25日よりⅠ区の側溝掘削の後、12月1日、人力による掘削を開始した。12月4日、寒波到来。西側水田の3層上面で・近世、近代畦畔と水路、暗渠を検出。12月5日、11月27日より行っていた3級、4級基準点の設置が終わる。12月11日、調査区北寄りの3c層まで掘削、中央から南よりの部分の掘削へ、17日には、ほぼ完了する。南寄りで柱穴・堅穴住居多数あることが判明。年内12月26日までⅣ層精査・掘削続行し、河川・土坑など掘削。遺物撤収。

62年1月6日より作業を開始し、精査と遺構掘削作業を繰り返した。27日には航空測量を実施し、断ち割り作業・補足調査・写真撮影・図面の作成を続行した。さらに北側の下層遺構Ⅳa・b層の掘削を行い、掘立柱建物・土坑を検出した。2月10日、大阪府教育委員会の立会の後、17日より北側の河川を除いた調査区全面に海砂による養生を行って埋め戻し、20日をもってⅠ区の調査を終了した。なお、調査区北端では、下層遺構のⅣb層以下は、遺構保存のため地山面までの掘削は行わなかった。

引き続きⅡ区の調査に技師森井・同虎間が着手した。2月25日に機械掘削を開始し、27日終了の後、人力掘削を開始する。Ⅱ～Ⅲ層を3月10日まで実施し、後精査。奈良時代の溝・ピット谷状の落込みなどを確認するが、遺構の密度は少ない。3月23日までに遺構・地山黄色土の掘削終了する。航空測量の後、断ち割りなど補足調査。調査区西側のみ海砂

養生後、調査を終了する。

また藤池地区で池を埋め立てて道路工事が行われることになり、62年1月28日から2月24日、工事と並行してまず護岸掘削に合わせたトレンチ調査を行った。調査には調査課第2班技師西村が担当することになった。池の造成によって削平を受けており、顕著な遺構は検出されなかったが、東西の延びる溝・河川が検出された。大阪府教育委員会の立会を経て調査は2月13日終了した。 (田中)

62年度調査

昭和62年4月20日、藤池堤防の調査を開始する。山直線予定地内において堤防に直交するようにおよそ4×11mのトレンチを設定する。盛土部分を現地表より約1m機械掘削する。のち、地山まで人力掘削を行う。4月21日、午前中に機械掘削を終了。断面及び平面実測を行う。4月22日、調査を終了する。

5月18日、上フジ遺跡Ⅲ調査区、Ⅳ調査区の発掘調査を開始する。現場事務所設置、準備を行う。5月29日、現耕作土層の機械掘削を開始する。6月2日、包含層の人力掘削を開始する。順次地山面上にて遺構確認調査を行う。6月12日、包含層掘削終了、遺構面精査及び遺構埋土の掘削を行う。6月16日よりⅣ調査区を平行し調査を行うことになる。6月18日、Ⅲ調査区の終了後、遺構の断割等補足調査を行い7月16日にⅢ調査区の調査を終了。

7月22日、上フジ遺跡Ⅰ調査区の両側を擁壁工事（1次）に伴う発掘調査を行う。東側は、遺構面深度が深いため立会調査にとどめ、西側のみ遺構掘削調査を行う。現耕作土の掘削及び包含層の人力掘削を行う。7月24日、包含層掘削を終了。遺構確認精査及び遺構掘削を行う。7月28日、擁壁部調査を終了する。なお、Ⅳ調査区は、7月29日に終了。

9月28日より、上フジ遺跡Ⅰ調査区・Ⅱ調査区の擁壁工事に伴う調査を行う。Ⅱ調査区は、遺構面深度、遺構密度の点から立会調査にとどめるⅠ調査区の両側及び南側を遺構掘削調査を行う。現耕作土及び包含層の一部を機械掘削する。のち、人力掘削に移る。9月30日、包含層掘削を終了し、遺構確認精査及び遺構掘削を行う。10月8日、航空測量を行う。のち、遺構断ち割り等の補足調査を行う。10月15日、調査を終了する。 (虎間)

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 層序と包含層の遺物

1 基本層序（第6・7図）

今回の調査区は、総延長約200m・比高差は約2m、南から北に向かい段々に高度を減じている。現在の地目は、水田及び畑地である。調査区内の層序はほぼ一様であるが、I調査区とII調査区の間を流れる溝を境にやや変化する。基本層序は以下の通りである。

0層盛土層。I区南端部に見られる盛土層は、溝の改修に伴うものである。II調査区の東側は全体に渡り試掘の攪乱を受けている。

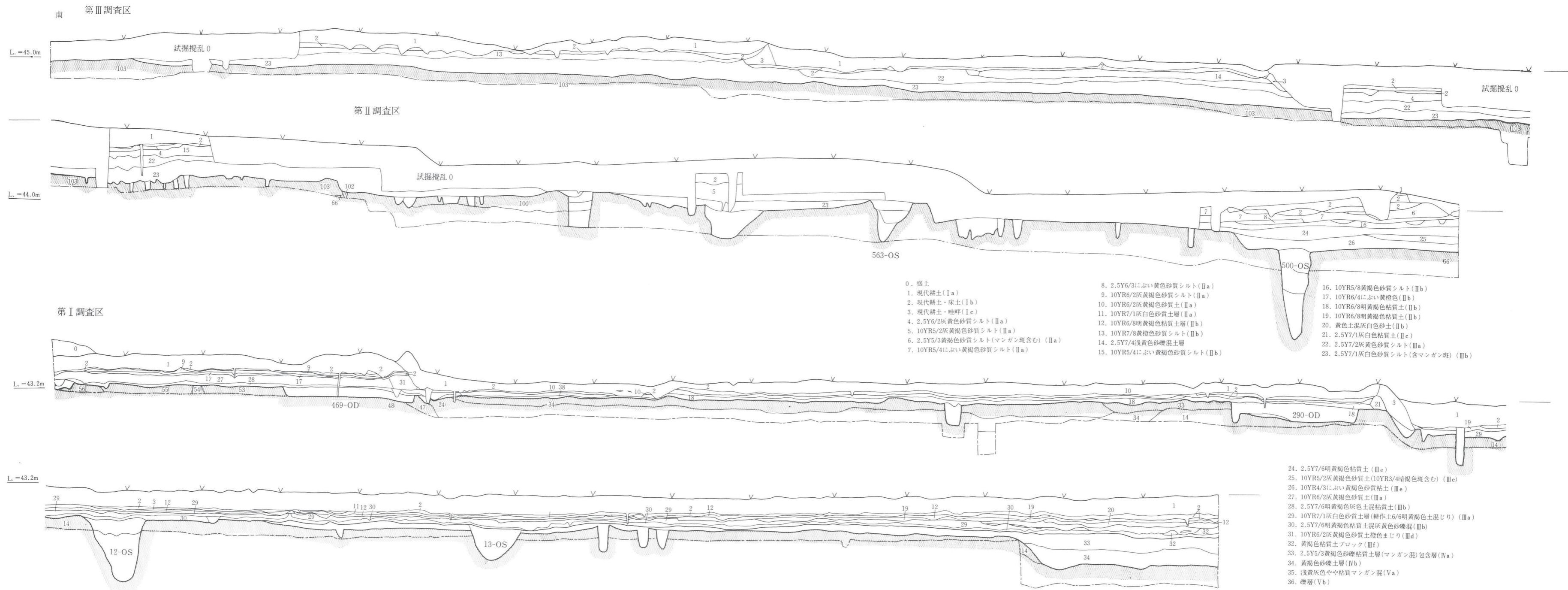
I層 現代耕作層。耕土層の中でも耕土をIa層、水田の床土をIb層、畦畔を形成する層をIc層とする。調査区の全域に見られる。

II層 近世耕土層。耕土層の中でも耕土をIIa層、水田の床土をIIb層、畦畔を形成する層をIIc層とする。ほぼ全域に見られるが、一部では現代の耕作による掘削を受け存在しないところもある。IIa層は、それぞれ差異があるが灰黄色系・黄褐色系の砂質シルトである。IIb層は、その土色差が多く層厚も一様でない。主なものは黄色系・黄褐色系・黄色系の砂質・粘質シルトである。IIa層の層厚はI区では15cm前後と薄く、II・III調査区では20cm以上となる。

III層 中世耕作土層。床土層を伴わない。IIIa～IIIc層は耕作土層である。調査区のほぼ全域に見られる。I区の中央付近では近世の耕作に伴う掘削を受けており見られなかった。その差異はあまり見られず灰黄色系の砂質シルトである。IIId層（31）は、畦畔を形成する層である。IIIe層（25・26）は、II調査区北端部における整地層である。

IV層 古墳時代から奈良時代にかけての包含層（33・34）である。I調査区北端部にのみ見られる。黄褐色系の礫混じり粘質シルトである。

V層 地山層である。大きく黄褐色系の粘質シルトと礫層の二つに分けることができる。I調査区北端から礫層、290—ODの南側からI区南端にかけては黄褐色系の粘質シルト層と交互に変化している。



第6図 調査地西壁縦断面土層図

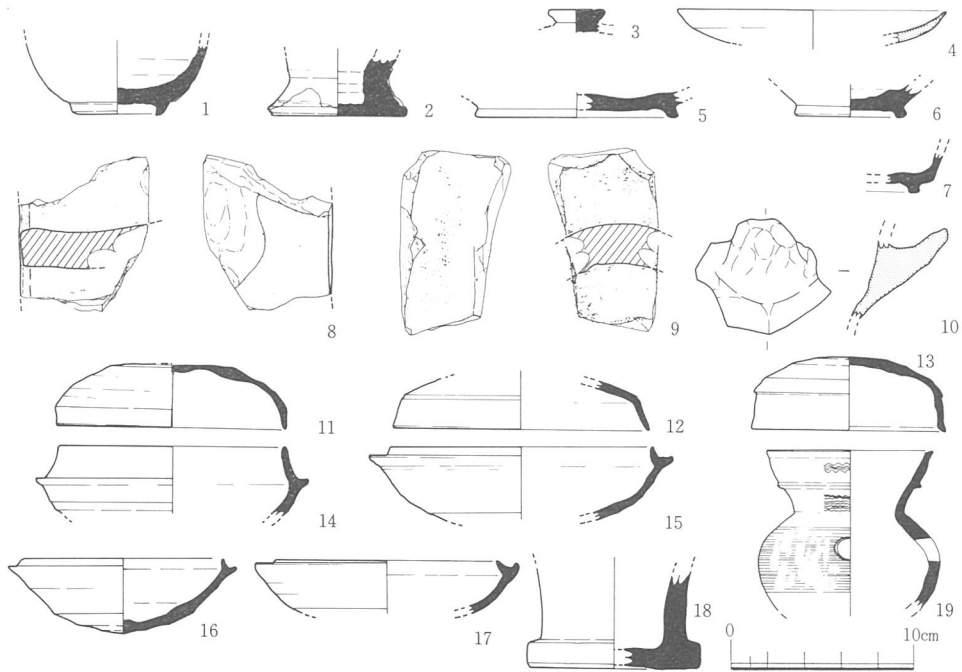
2. 包含層と出土遺物

I 調査区包含層（第8～13図、図版二八・二九）

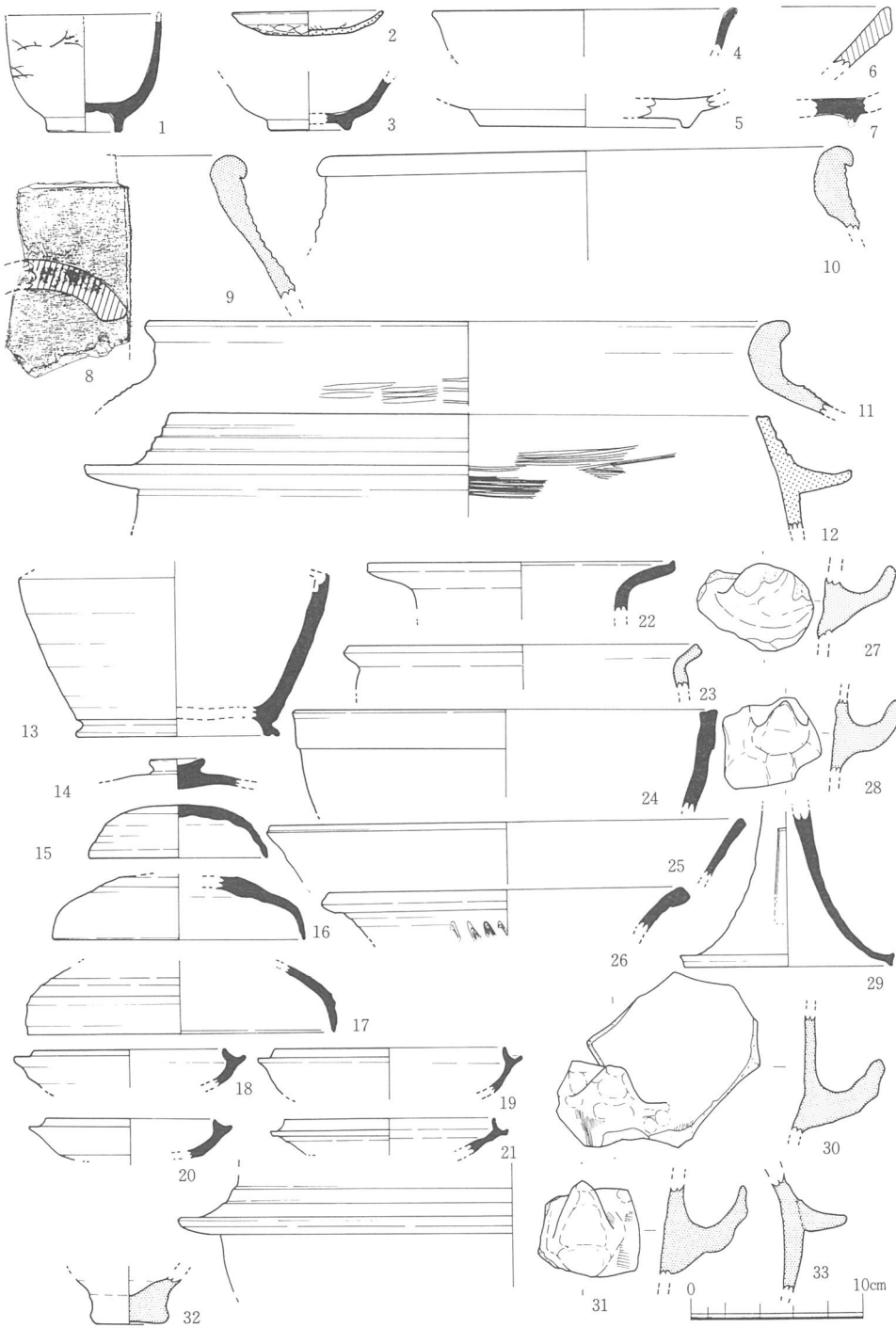
I 調査区は4枚の田畑からなるが、大きくは3段の地形に分かれ、北に向かって低くなっている。この段の内II調査区南寄りに認められる段は、おもに近世耕作に関わる段で、それまでに形成されていた中世の耕作土と思われるものを削る形で大きな畦畔を作っている。畦畔の北の低い側に設けられた溝は地山面に達しているが、地山とその直上の層は段の南北に渡って水平な堆積をしている。

中央部付近の段は地山面まで削って作り出されている。2時期の畦畔があり、古い畦畔は段の上に地山から約0.3m盛り上げ、北側を0.5mほど削って高い段差を作り、溝を設けている。新しい畦畔はその上部にさらに0.2mほど土を盛り、古い時期の溝も埋めている。この北側は12—OS付近まで古い時期の畦畔に対応する耕作土は存在しない。

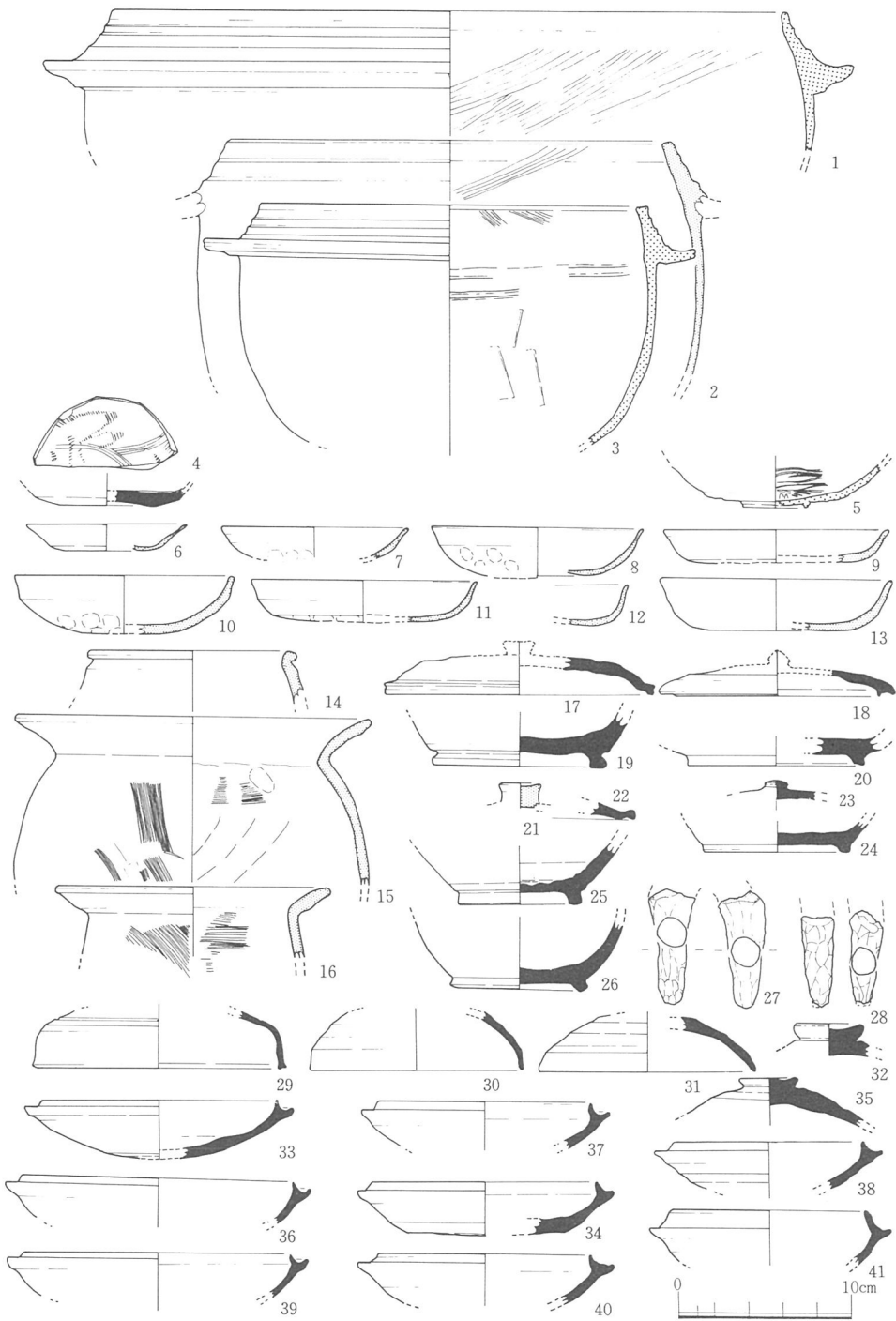
基本層序で記した各層の分布状況を見ると、南から1段目と2段目にはI～III層までが分布する。IV層は存在しない。1段目ではI～III層は均等の厚さで分布し、2段目ではIII層が全体にわたって薄く堆積している。2段目から3段目にかけては古墳時代の竪穴住居



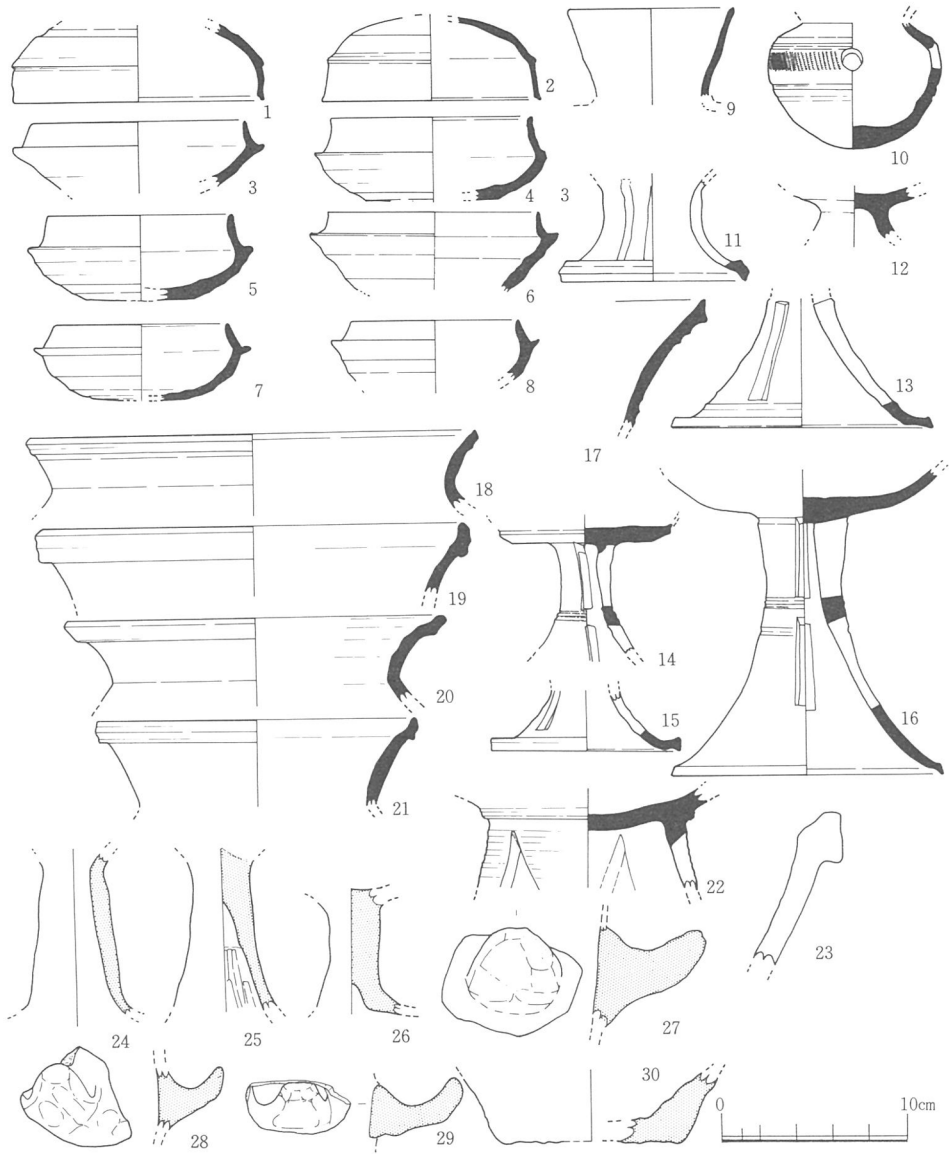
第8図 I 調査区第II層出土遺物実測図



第9図 I調査区第II(II a)~III(III c)層出土遺物実測図



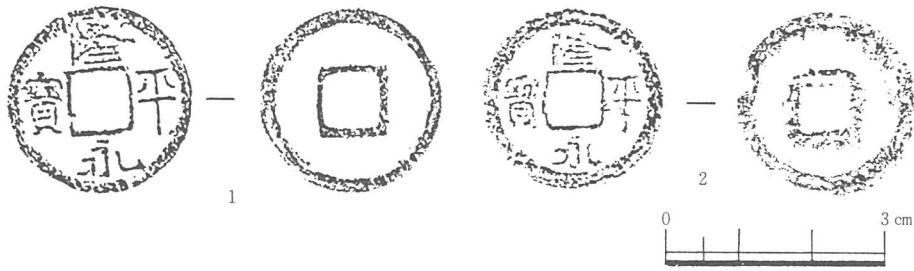
第10図 I 調査区第III～IV層出土遺物実測図



第11図 I 調査区第IV層出土遺物実測図

址や土坑、ピット群が多数検出されている。特に2段目の南東寄りには大小のピットが集中するが、鎌倉時代以降のピットも含まれている。古墳時代から奈良時代にかけての包含層（IV層）が分布していないので個々の時期の比定は確実には行えなかったものがある。

3段目は先述のようにその南端付近で近世遺構の耕作地の造成によって失われているが、12—OS付近以北では残っていた。この付近では古墳時代から飛鳥時代の包含層である4



第12図 I 調査区第IV層E18BL地点出土古銭

層も分布している。3段目北寄りでは4層は0.2m近い層厚をもち掘立柱建物など当該期の遺構もこの地点に集中的に検出されている。

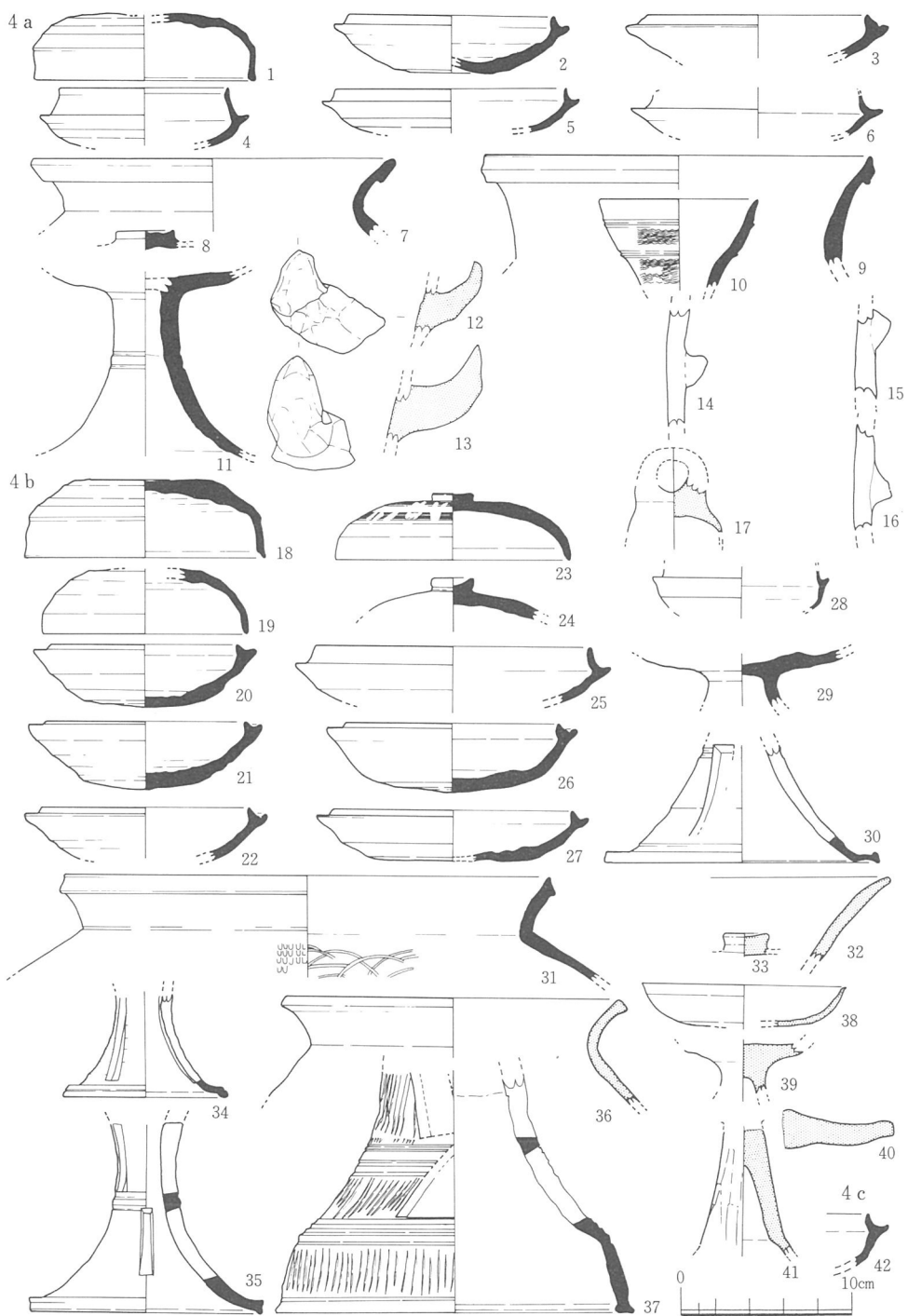
出土遺物は近世陶磁器から古墳時代の土師器、須恵器、弥生時代から先土器時代にかけての各種の石器など多様なものがある。石器については別項を参照されたい。

II層の出土遺物には近世陶磁器の他、布目瓦、皿・羽釜・甕などの各種の瓦器、瓦質土器、奈良時代・古墳時代須恵器・土師器がみられる。

III層の出土遺物は調査時にII層とIII層の区分について必ずしも明確には行えていない所もあったので一括して記載する。椀・皿・羽釜等の瓦器・瓦質土器のほか青磁皿、奈良時代から古墳時代の須恵器・土師器がある。第10図27・28は土師質の土製品で現存の形状からみて土馬の可能性も考えられる。

IV層出土の遺物には多量の須恵器のほかに土師器高杯・甌把手、土師質蛸壺、埴輪片などがある。須恵器は杯蓋・身、壺、甕、高杯、甕、器台など各種があり、中村編年のI型式からIII型式まで時間幅が認められる。須恵器の様相ではIV層出土遺物は古墳時代を主体とするが、土師器には奈良時代に属すると思われるものも含まれ、少量ながら弥生時代の土器片も検出されている。さらに特筆されるものとして2枚の銅銭が出土している。

銅銭は2枚とも延暦15(796)年初鑄の隆平永寶である。このうち第12図1は一部にひび割れがあり、「隆」が錆で不鮮明なものの遺存状態はよく、天地25.5mm、左右24.95mm、穿の天地7.25mm、左右7.2mm、縁部の厚さ1.75mmを測る。第12図2はひび割れが激しく遺存状態はよくないものの文字は全体的に読み取ることができる。天地24.9mm、左右25.4mm、穿の天地6.5mm、縁部の厚さ1.9mmを測る。「平」の下部に鑄型もしくは鑄込み時のものと思われる傷がみられる。この2枚の銭は天地左右の径が0.5mm前後それぞれ異なること、1には「平」に傷が無いこと、2の「永」の字は最後のハネが認められないことなどから明らかに別の鑄型の鑄銭であると考えられる。



第13図 I 調査区第IV (IV a ~ IV c 整地層) 層出土遺物実測図

II・III調査区包含層

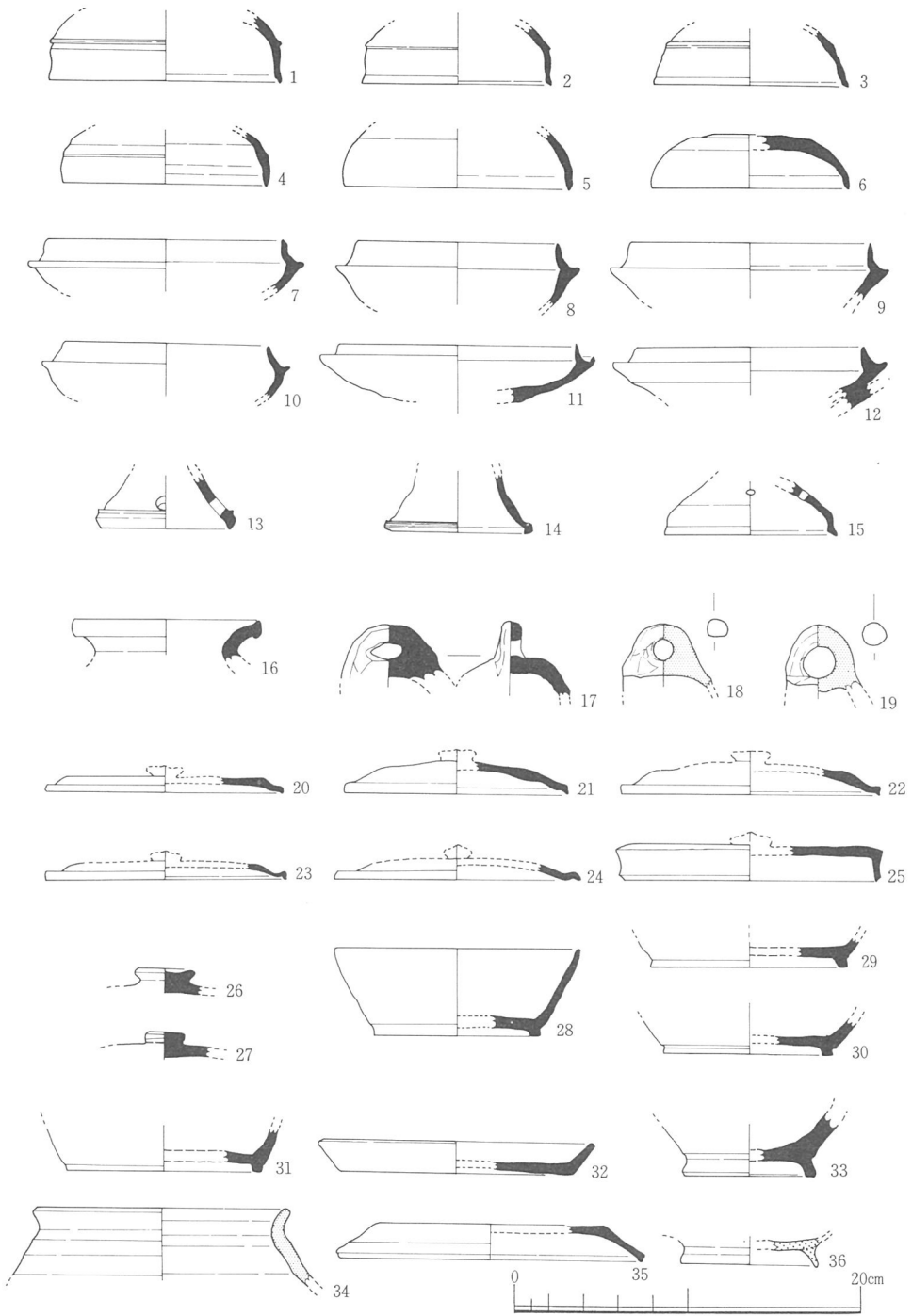
II・III調査区内には6枚の水田が存在した。現耕作土面は南端で標高約45.3m、北端で44.1mと、南から北に向かい段々と高度を減じている。今回の調査において、堆積を大きく北側で4層、南側で1層に分けることができる。I層は現耕作土層である。II層は近世耕作土層である。床土層をともなう。石器および古墳時代から近世までの遺物を含む。IIIa層は中世耕作土層である。床土層をともなう。石器及び古墳時代から中世までの遺物を含む。IIIb層は床土をともなわない中世包含層、あるいは整地層である。含まれる遺物はIIIa層と変わらない。IV層は、無遺物層の地山となり、II調査区北半部は10cm大の円礫を含むシルト層である。南に移るにつれて、しまりの弱い黄色系の粘質土層に変化する。その下位に粘質の強い黄色系の粘質土が存在する。

以上のI～IV層が現代～古墳時代の包含層にあたるが、II・III調査区においては、II層・III層を同時に掘削し、一括して遺物を採取した。よって一括して出土遺物を示す。

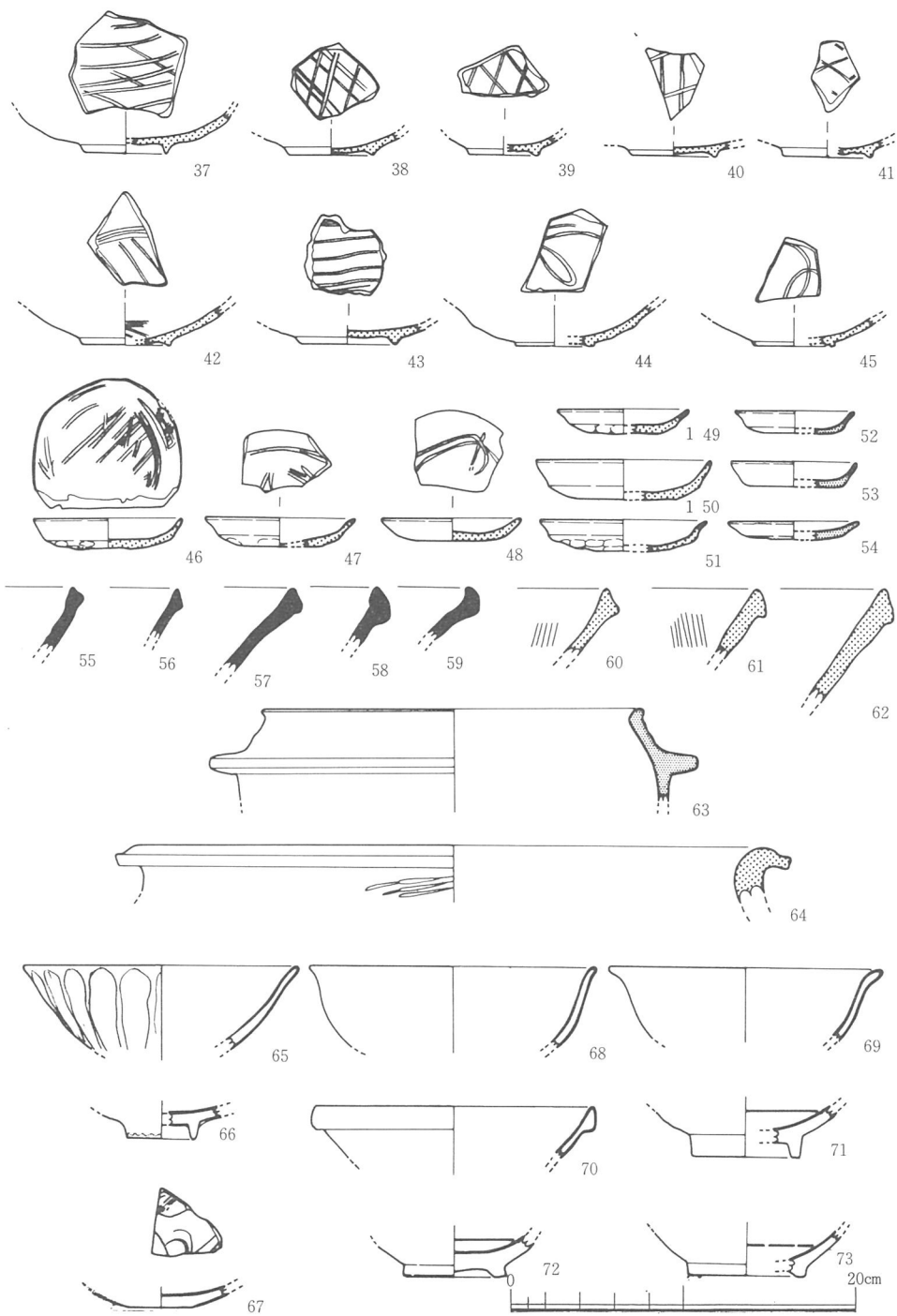
II～III層出土遺物（第14・15図、図版二八・二九）

II・III調査区のII～III層からは、近世～先土器時代までの遺物が出土した。以下主要な遺物の解説を加える。

1～6は、須恵器杯蓋である。いずれも復元口径11.2～13.4cmの範疇に含まれる。7～12は、須恵器杯である。いずれも復元口径11.6～14.9cmの範疇に含まれる。12は体部に他の破片を窯着している。13～15は、須恵器高杯である。いずれも復元脚部径7.4～10.0cmの範疇に含まれる。16は、須恵器壺である。復元口径10.7cm。口縁端部をやや丸く作り上方につまみ上げる。17は、須恵質の蛸壺形土器である。現存器高4.2cm。鈕は横長の楕円を呈する。18・19は、土師質の蛸壺形土器である。18は現存器高3.4cm。鈕内径1.2cm。19は現存器高3.7cm。鈕内径1.9cm。20～24は、須恵器杯蓋である。いずれも復元口径13.0～15.0cmの範疇に含まれる。器高が比較的高く厚手のものと、器高が低く薄手で端部が「く」の字状に屈曲する2タイプがある。25は、須恵器壺蓋である。復元口径14.6cm。現存器高2.1cm。端部は平で内傾する。26・27は、蓋のつまみである。28～31は、須恵器杯である。28は復元口径14.0cm。復元底径9.7cm。器高5.0cm。底面をヘラケズリし内面にナデを施す。29～31は復元底径9.9～11.3cmの範疇に含まれる。32は、須恵器皿である。復元口径15.5cm。現存器高1.7cm。底面、内面ともヘラケズリを施す。33は、須恵器壺である。復元底径7.4cm。外面にヘラケズリを施す。34は、土師器甕である。復元口径14.4cm。胎土は緻



第14図 II・III調査区第II～III層出土遺物実測図（1）



第15图 II・III調査区第II～III層出土遺物実測図(2)

密で硬質に焼かれている。35は、須恵器杯蓋である。復元口径17.5cm。端部を丸く作り1条の沈線を巡らせる。36は、黒色土器碗である。復元底径7.8cm。現存部では内面にのみ炭素付着がみられる。37～45は、瓦器碗である。37～45は、瓦器碗である。37～41、底部内面に斜格子のヘラミガキが施されている。高台の断面形は、三角形を呈する。42・43は底部内面に並行ヘラミガキが施されている。44・45は底部内面に螺旋条のヘラミガキが施されている。46～51は、瓦器皿である。46～48は内面にヘラミガキを施し、口縁部外面にヨコナデを施す。底面に指頭圧痕が見られる。46、口径8.6cm、器高1.8cm。52～54は、土師質皿である。復元口径7.0～7.6cm。55～59は、須恵質すり鉢である。60～62は、瓦質鉢である。63は、土師質羽釜である。復元口径21.8cm。現存器高5.4cm。口縁端部は短く外反する。つばは短く丸みを帯びている。体部には右方向のヘラケズリを施す。64は、瓦質甕である。復元口径36.3cm。口縁部は大きく外反し端部に面をもたせる。頸部外面にタタキを施す。65～68は、青磁碗である。65、復元口径36.3cm。体部に凌蓮弁を施す。66、復元口径16.5cm。67、復元口径15.8cm。68、復元底径3.8cm。高台端部の内外面を露体とする。69・70は、白磁碗である。69、復元口径16.0cm。70、復元口径6.2cm、高台高1.3cm。底部外面をカキトリし、高台内面を露体とする。71、青磁皿である。底部外面をカキトリする。内面に毛彫りを施す。72、73は白磁碗である。72、復元底径5.9cm、高台高0.6cm。体部外面をカキトリし、高台内面を露体とする。内面に沈線を1条巡らせる。73、復元底径6.8cm、高台高0.6cm。体部外面をカキトリし、高台内面を露体とする。

石器・剥片類（第16～18図、図版二六・二七）

第II層から第IV層にかけての各包含層より検出されており、特に第III層と第IV層からの出土が多かった。出土地点も第I調査区の北側と南側に若干の集中は観察されるものの、第I調査区から第III調査区のはほぼ全体で認められる。（第16図）

ナイフ形石器が2点（第17図1・2）、石核1点（同図3）、石鏃5点（第18図1～5）、石匙1点（同図6）と剥片が33点（図版二七）検出された。時期的には、先土器時代から縄紋時代にかけてのものであり、剥片類を含めても縄紋時代に属するものが大部分である。石材は全てサヌカイトであった。剥片の中には表面の風化が弱いものを含んでおり、弥生時代に属するものも含まれる可能性が考えられる。

ここでは、石器と石核について9点を図示した。剥片類は写真のみを提示している。図示した資料について時代ごとに説明したい。

先土器時代

ナイフ形石器 2 点と石核 1 点の合計 3 点が確認されている。

ナイフ形石器 (第17図 1・2、図版二六)

1 は第 II 調査区南側から出土したナイフ形石器である。出土地点は E 23 C U で、562—O S 埋土中(第 IV c 層)から検出された。最大長 60.5 mm、最大幅 16.4 mm、最大厚 6.6 mm、重量 8.25 g である。完形品の国府型ナイフであり、柳葉形を呈する。翼状剥片を素材としているが、刃潰しによって打点は除去されていた。a 面左側縁上方に二次調整剥離が施され、刃部を形成していると思われる。

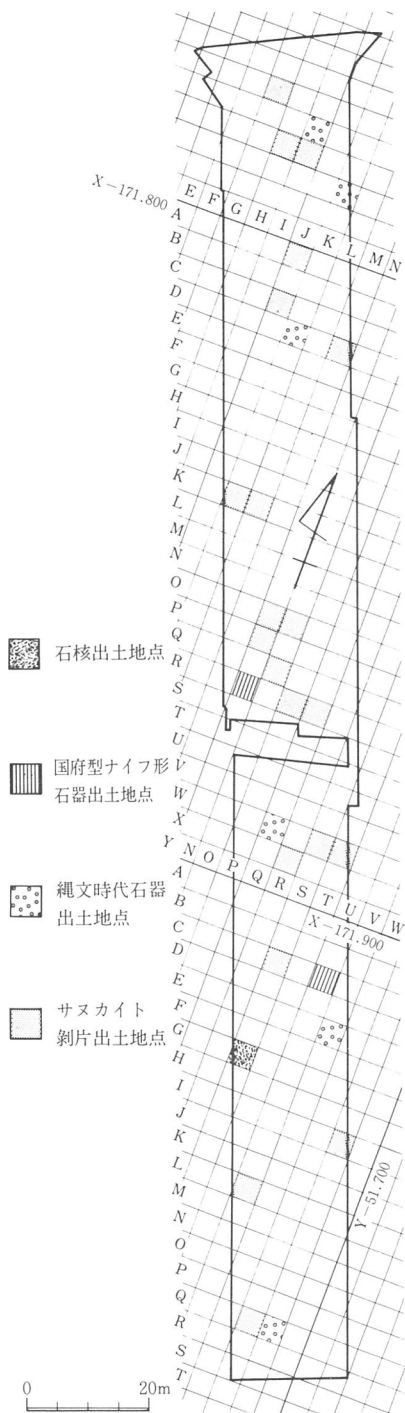
2 は上端の一部と下端を欠損した、ナイフ形石器である。刃潰しは、背面に対してほぼ直角に施されており、この際に背面の稜線が除去されていた。一次調整剥離による鋭い縁辺を、刃部としている。国府型ナイフ形石器になると思われる。出土地点は、第 I 調査区南端にあたる E 18 R N であり、第 II a から III c 層までの間で検出された。現存長 40 mm、最大幅 16 mm、最大厚 8 mm、重量は 4.34 g である。

石核 (第17図 3)

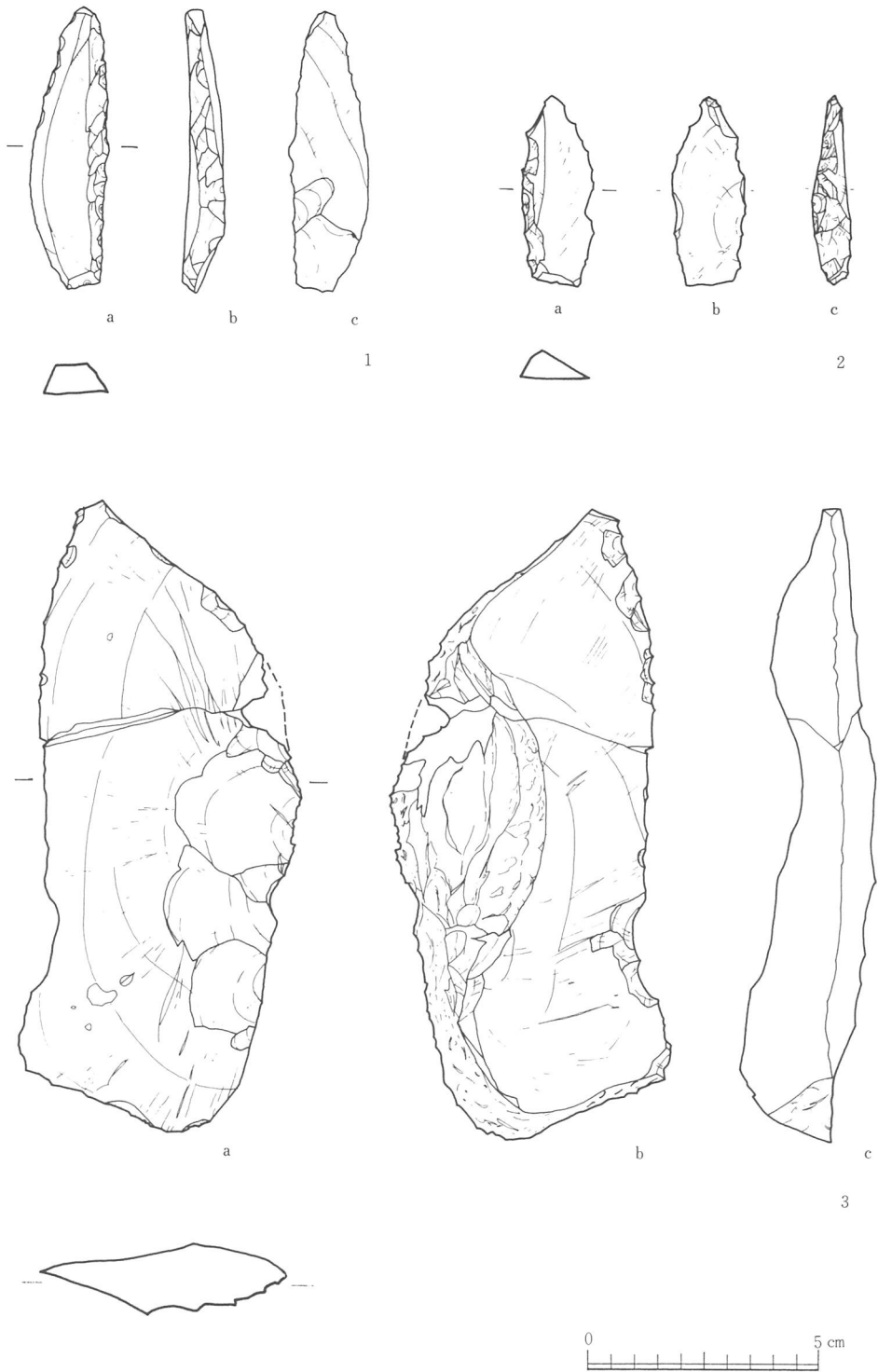
3 は大形の横長剥片石核である。a 面右側縁中央に打点をもち、b 面左側縁部と下方縁部には海綿状の礫面を残している。上半部は検出時の打撃により折れている。現重量は 135.09 g であった。

縄紋時代

この時期に属する石器としては、石鏃が 5 点



第16図 石器出土地点の分布図

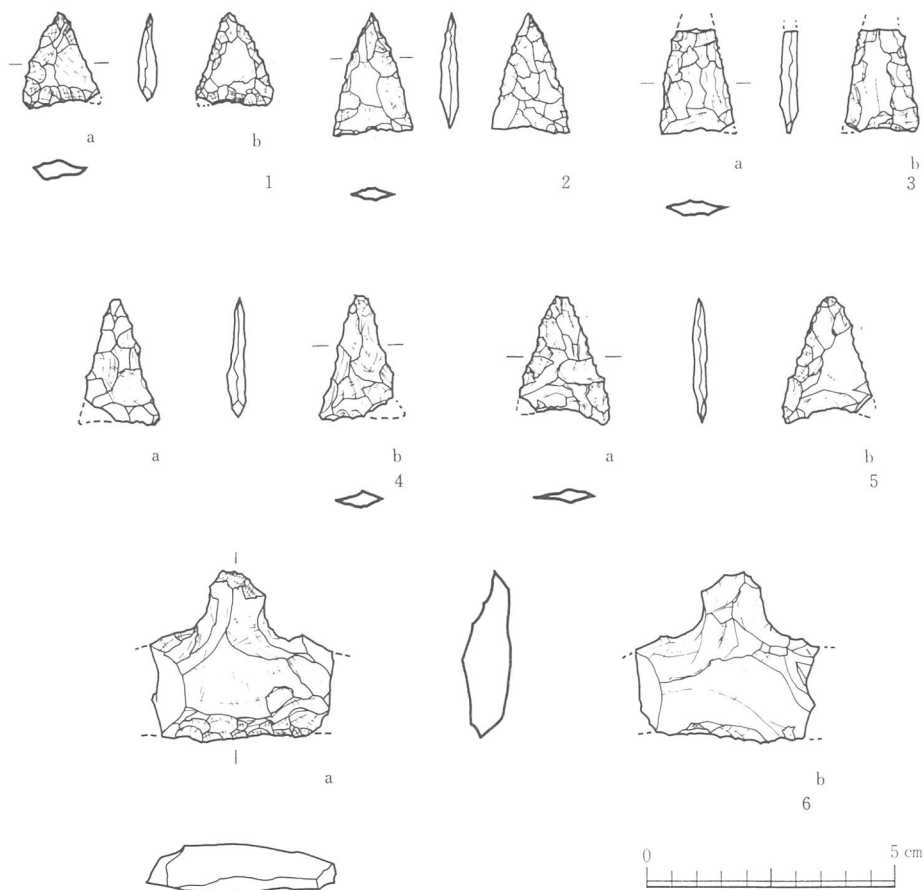


第17図 I～III調査区出土石器実測図(1)

と石匙が1点出土している。

石鏃（第18図1～5、図版二六）

全て凹基無茎式であった。1は、E23EVの526—OS埋土中から検出された。a面の基部右端が欠損している。最大長18.4mm、現存幅14.9mm、最大厚4.2mm、重量0.92gであった。2の出土地点は、E18DKであり、第IV層から検出されている。完形品であった。最大長23.7mm、最大幅15.5mm、最大厚3.4mm、重量0.88gである。3は、先端部とa面の基部右端が欠損しており全体の風化が著しい。E13UIの402—OS埋土中から出土している。現存長20.2mm、現存幅14.6mm、最大厚3.8mm、重量1.11gであった。4は、A面の基部左端が欠損しており、全体の風化も著しく稜線が不明瞭である。E13WK～VJの4—OS下層落ち込み埋土中から検出された。現存長24.8mm、現存幅14.9mm、最大厚3.7mm、重量0.94gである。5の出土地点はE18WQであり、第III層中より検出された。a面の基



第18図 I～III調査区出土石器実測図（2）

部左端が欠損しているが、やや幅広の形態を示す。現存長24.8mm、現存幅17.8mm、最大厚3.1mm、重量1.08gである。

完形品は2の1点のみで、残りはほとんど基部の片方が欠損していた。この部分を欠損する例が多い点に注目される。石鏃の使用に伴う欠損の可能性が大きい。5点とも形態的特徴と調整剥離等の技法的特徴から判断して、後期に伴うものであると考えられる。

石匙（第18図6、図版二六）

横長石匙1点が出土している。6は両端を欠損しており、E23LV地点の第Ⅲ層中から検出された。つまみ部分の先端に自然面を残している。下端の刃部については、a面にのみ二次調整剥離が施されており、片刃状を呈していた。重量は11.30gである。

近畿地方においては、特に後期以降つまみを有さないいわゆる不定刃器にその機能的立場が転換するようである。



第19図 調査風景点描

第2節 遺構と遺物

昭和61・62年度の調査で、竪穴住居址・掘立柱建物跡をはじめ、柵列・溝・土坑などが検出された。以下主要な遺構・遺物各説明を時代順に行う。

1 古墳時代以前 (第22～24図、図版五)

土坑

603—〇〇

II調査区中央に位置する。平面は南東方向に張り出し部をもつ楕円形を呈し、長さ3.70m、幅2.30m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-43°-Eを示す。埋土は褐色(10Y R 4/4)シルト質砂で礫を若干含む。

608—〇〇

II調査区中央に位置する。西端が側溝で切られるが平面長楕円形を呈し、現存長2.56m、幅1.00m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-62°-Eを示す。埋土は暗褐色(10Y R 3/4)砂質シルトである。

610—〇〇

II調査区中央に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ2.47m、幅1.11m、深さ0.37mを測る。主軸方向はN-62°-Wを示す。埋土は褐色(10Y R 4/6)粗砂質シルトである。

635—〇〇

II調査区北側に位置する。平面は長楕円形を呈し、長さ2.33m、幅0.82m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-85°-Wを示す。埋土は褐色(10Y R 4/4)砂質シルトで、若干の小礫を含む。

587—〇〇

II調査区南側に位置する。平面三角形を呈し、長さ1.73m、幅1.21m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-80°-Eを示す。埋土は極暗褐色(7.5Y R 2/3)シルトである。

586—〇〇

II調査区南側に位置する。平面楕円形を呈し、長さ1.70m、幅1.26m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-25°-Wを示す。埋土は黄褐色(10Y R 5/6)砂質粘土である。

596—〇〇

II調査区南東部、562—〇Rの西肩部に位置し、562—〇Rに先行する。平面長楕円形を



第20図 上フジ遺跡遺構全体図 (1/500)

呈し、長さ1.86m、幅0.68m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-80°-Eを示す。埋土は、黒褐色(10Y R2/2)砂質シルトで、若干礫を含む。

620—00

II調査区北側に位置する。平面は北西方向に張り出しをもつ楕円形を呈し、長さ2.14m、幅1.24m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-78°-Wを示す。埋土は褐色(10Y R4/6)砂質シルトで、小礫を含む。

630—00

II調査区の北側に位置する。平面は三角に近い楕円形を呈し、長さ1.67m、幅1.02m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-77°-Eを示す。埋土は暗褐色(10Y R3/4)粗砂質シルトで、若干礫を含む。

591—00

II調査区南側に位置する。平面は不整形を呈し、長さ1.23m、幅0.95m、深さ0.36mを測る。主軸方向はN-68°-Eを示す。埋土は黒褐色(10Y R2/3)砂質シルトである。

592—00

II調査区南側に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ1.30m、幅0.80m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-47°-Eを示す。埋土は、褐色(10Y R4/6)砂質シルトである。

598—00

II調査区中央に位置する。平面は不整な長楕円形を呈し、長さ1.69m、幅0.70m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-33°-Eを示す。埋土は暗褐色(10Y R3/3)シルト砂質で若干礫を含む。

602—00

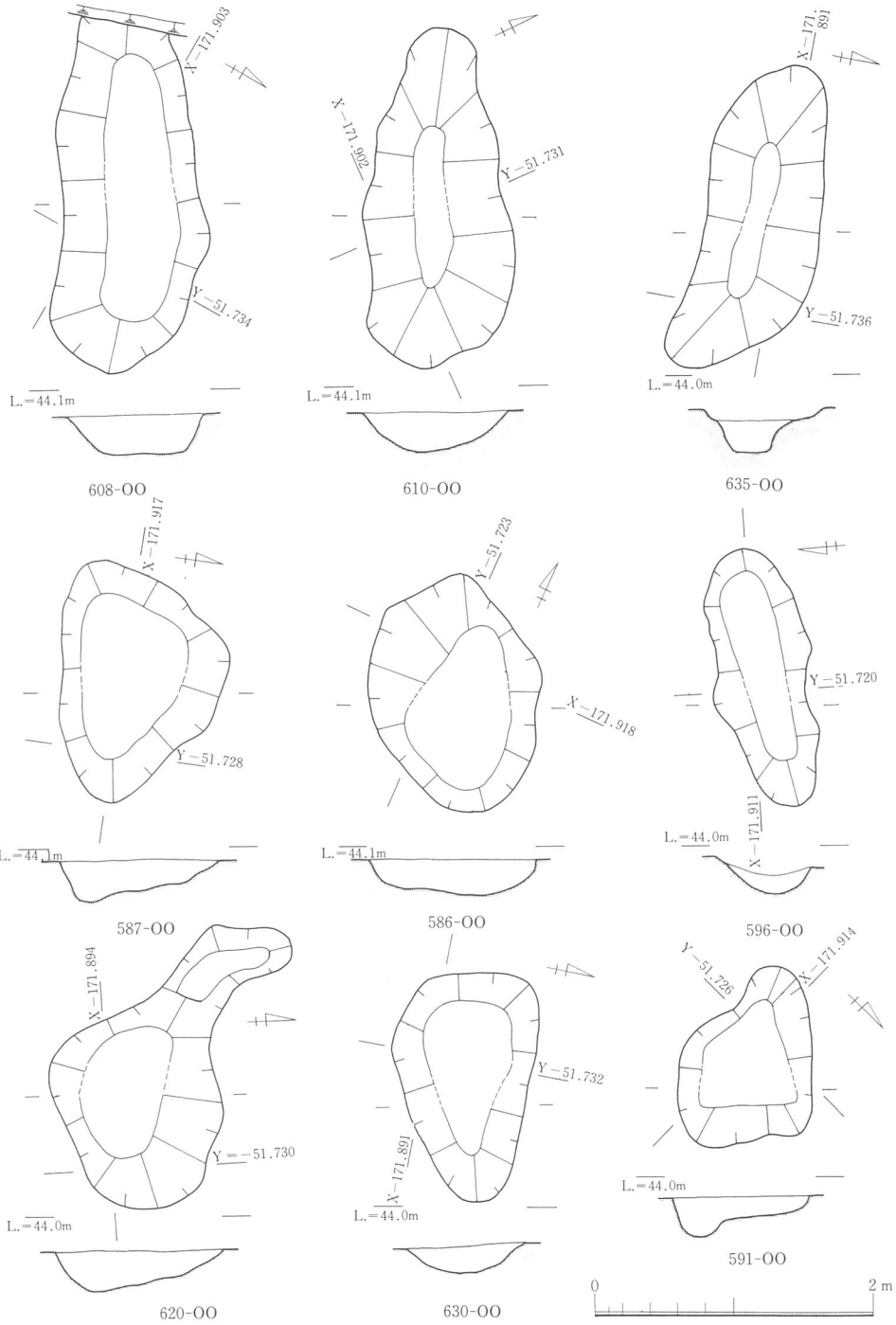
II調査区中央に位置する。平面はやや歪んだ三角形を呈し、長さ1.54m、幅1.01m、深さ0.47mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。埋土は黒褐色(10Y R3/2)砂質シルトである。

605—00

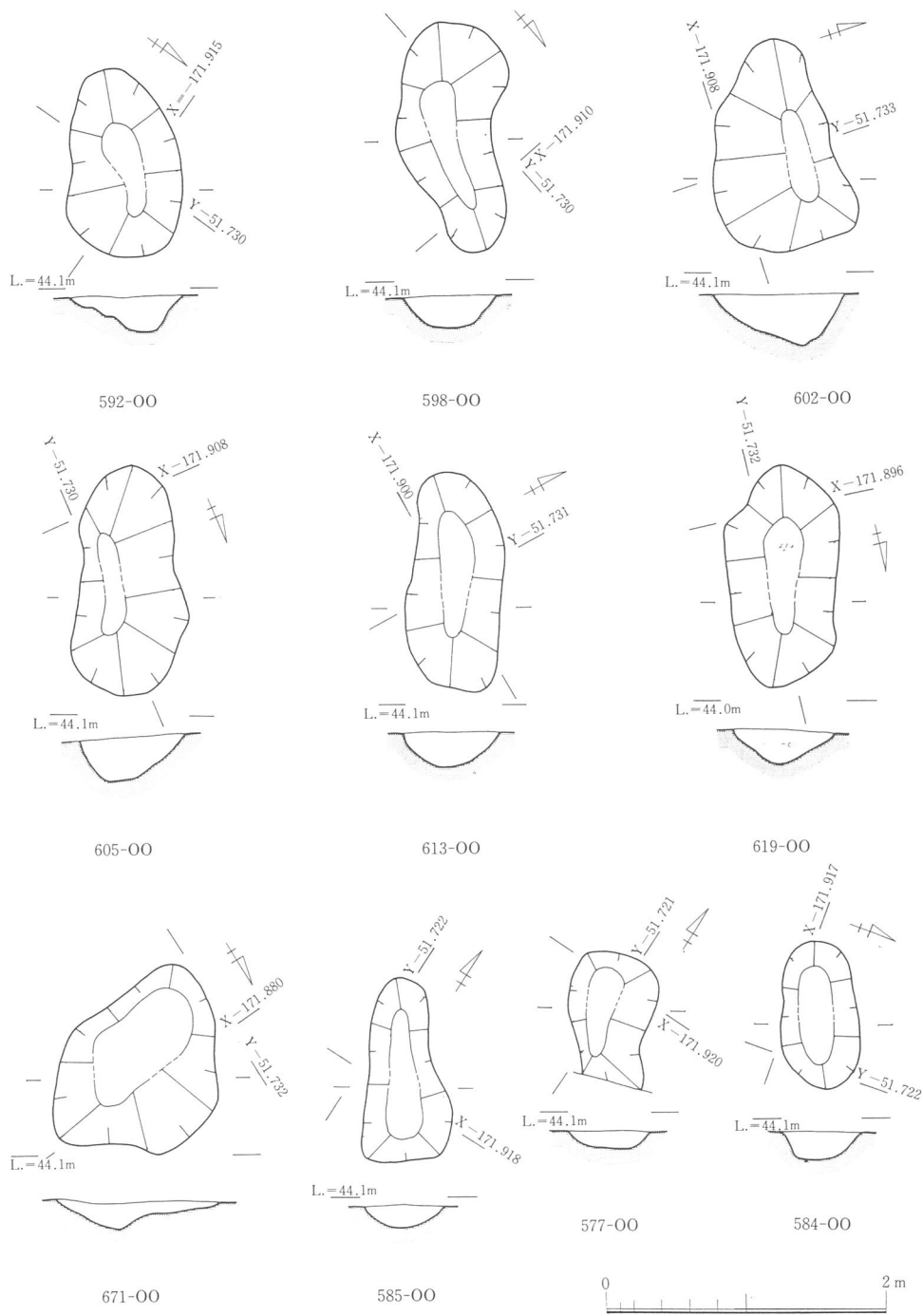
II調査区中央に位置する。平面は瓢箪形を呈し、長さ1.63m、幅0.78m、深さ0.26mを測る。主軸方向はN-28°-Eを示す。埋土は褐色(7.5Y R4/4)砂質シルトである。

613—00

II調査区中央付近に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ1.54m、幅0.70m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-62°-Wを示す。埋土は暗褐色(10Y R3/2)砂質シルトである。



第22图 土坑608·610·635·587·586·596·620·630·591平面·断面图



第23图 土坑592·598·602·605·613·619·671·585·577·584平面·断面图

619—00

II調査区北側に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ1.60m、幅0.82m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-15°-Eを示す。埋土は暗褐色(10Y R3/4)粗砂質シルトである。

671—00

II調査区北端に位置する。平面は不整三角形を呈し、長さ1.35m、幅1.13m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-73°-Eを示す。埋土はにぶい黄褐色(10Y R5/3)粗砂質シルトである。

585—00

II調査区南側に位置する。平面は長い三角形を呈し、長さ1.32m、幅0.63m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-35°-Wを示す。埋土はにぶい黄褐色(10Y R5/4)細砂である。

577—00

II調査区南端からIII区に位置する。平面は長楕円形を呈し、現存長1.00m、幅0.70m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-38°-Wを示す。埋土は褐色(10Y R4/6)砂質粘土である。

584—00

II調査区南側に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ1.04m、幅0.56m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-65°-Eを示す。埋土は褐色(10Y R4/4)砂質粘土である。

589—00

II調査区南側に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ1.25m、幅0.56m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-50°-Eを示す。埋土は黄褐色(10Y R5/8)砂質粘土である。

590—00

II調査区南側に位置する。平面は不整楕円形を呈し、長さ0.98m、幅0.52m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-50°-Eを示す。埋土は黄褐色(10Y R5/6)砂質土である。

582—00

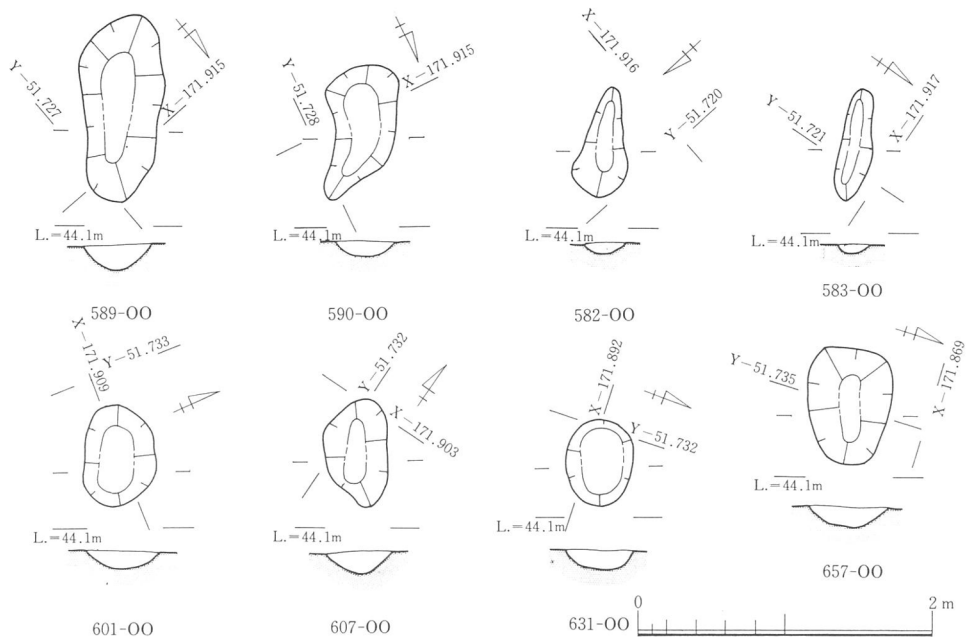
II調査区南側に位置する。平面は長い三角形を呈し、長さ0.76m、幅0.36m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-40°-Wを示す。埋土は暗褐色(10Y R3/4)細砂である。

583—00

II調査区南側に位置する。平面は長楕円形を呈し、長さ0.80m、幅0.22m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-80°-Wを示す。埋土は暗褐色(10Y R3/4)シルト質砂である。

601—00

II調査区中央に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ0.70m、幅0.52m、深さ0.09mを



第24図 土坑589・590・582・583・601・607・631・657平面・断面図 (S=1/50)

測る。主軸方向はN-60°-Wを示す。埋土はオリブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗砂である。
607-00

II調査区中央に位置する。平面は不整形を呈し、長さ0.71m、幅0.45m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-38°-Wを示す。埋土はオリブ褐色(2.5Y4/4)シルトで若干礫を含む。

631-00

II区北側に位置する。平面は楕円形を呈し、長さ0.60m、幅0.50m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-69°-Eを示す。埋土は黄褐色(10YR5/6)砂質シルトで、小礫を含む。

657-00

II調査区北側に位置する。平面は隅円長方形を呈し、長さ0.80m、幅0.62m、深さ0.21mを測る。主軸方向はN-72°-Eを示す。埋土は褐色(10YR4/4)砂質シルトで、礫を含む。

以上に述べた28基の土坑は、古墳～奈良時代遺構面である明黄褐色シルト層より下位で検出されたものである。また、埋土中に人為的な遺物を全く欠いている。従って時期は、古墳時代後期以前としか明らかにできない。また、周辺に同時期と思われる人為的な遺構も認め難いことから、風倒木等の痕跡の可能性も高いといえよう。

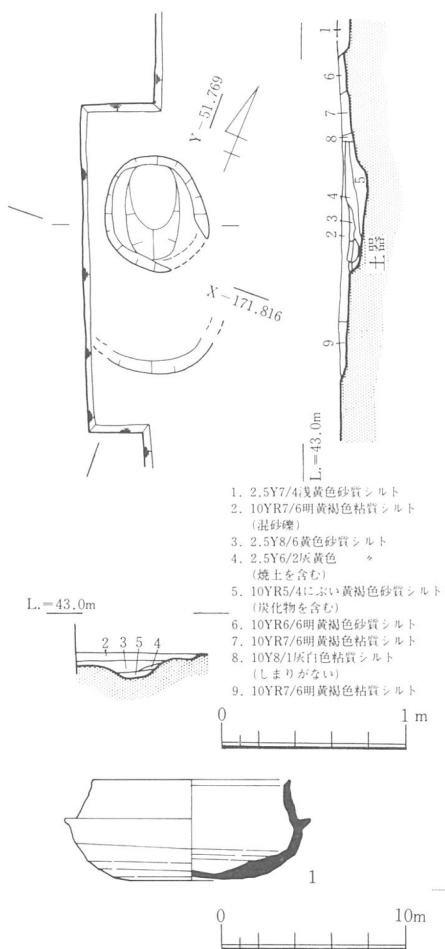
2 古墳時代～奈良・平安時代

この時期に属する遺構は I 調査区全面と II 調査区北半で検出された。特に、I 調査区の南半の高まりに集中している。時期的には 5 世紀後半から 6 世紀後半に含まれるものがほとんどである。遺構としては竪穴住居跡と掘立柱建物跡、土坑、溝等がある。

竪穴住居跡

1116—O D (第25図、図版三〇)

1116—O D は、擁壁 2 次調査の際に I 調査区西側で検出した。検出したのは竈と思われる土坑だけで、住居跡の壁等は検出し得なかった。土坑は長径 64 cm、短径 56 cm を測り、長軸方向に二段の掘形がある。深さは約 10 cm。内部には灰、焼土が堆積し、その形状や大きさから竈と推定した。



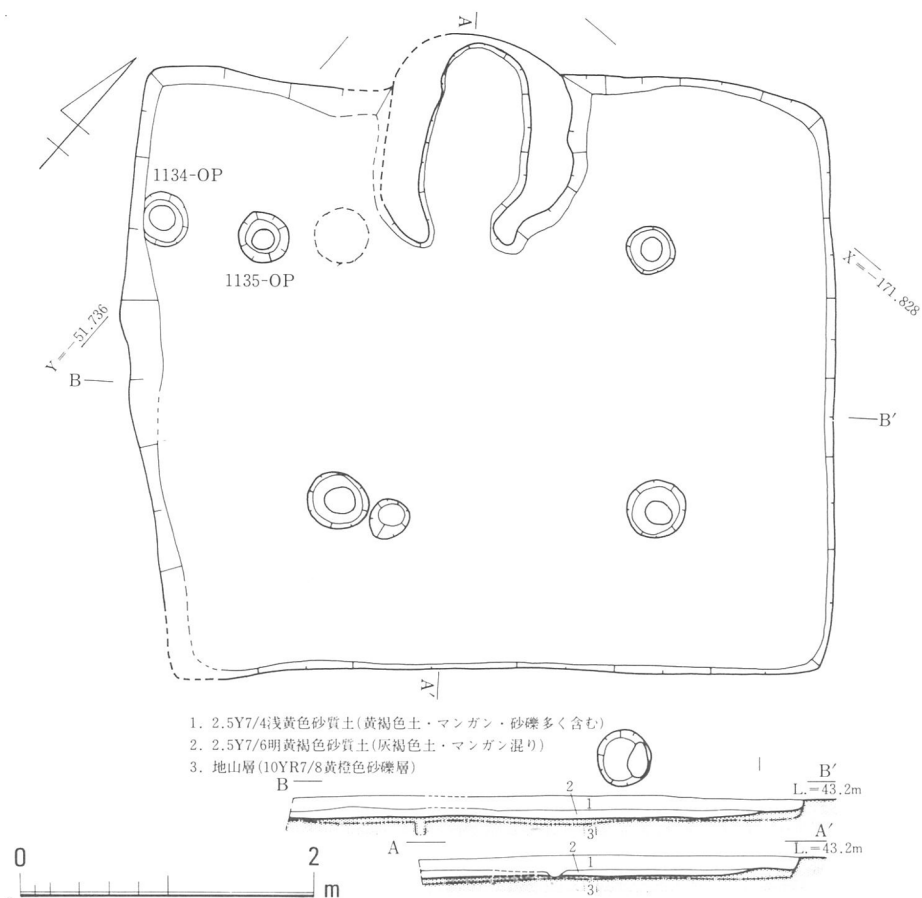
第25図 竪穴住居跡1116竈
平面・断面図、出土遺物実測図

さから竈と推定した。

南北の土層断面では、竈壁体と思われる 2・3・4 の堆積を確認したが、竈本体にあたるものなのか、竈崩落に伴ういわゆる流土であるかは不明である。また、平面精査においても竈の開口方向は明らかにし得なかった。ただ、堆積状況と I 調査区の調査時に住居跡の平面プランが検出されなかったことから住居跡の本体は西側に広がるものと考えられる。

土坑の上面南端、灰・焼土層より、ほぼ完形の須恵器杯身を検出した。杯身は、ほぼ水平の状態にあり、杯身の上面には杯・焼土を含まない層が堆積している。杯身の口縁部が 4 cm にわたって欠けており、そのうち 1 cm 分を同じ層より検出した。

須恵器杯身 (第25図)。口径 10.8 cm、器高 5.5 cm。口縁端部に内傾する面を持つ。底部外面のおよそ 1/2 に右方向の回転ヘラケズリを施す。中村編年 I 型式 5 段階の範疇に含まれることから、この住居跡は 5 世紀末から 6 世紀初頭に比定される。

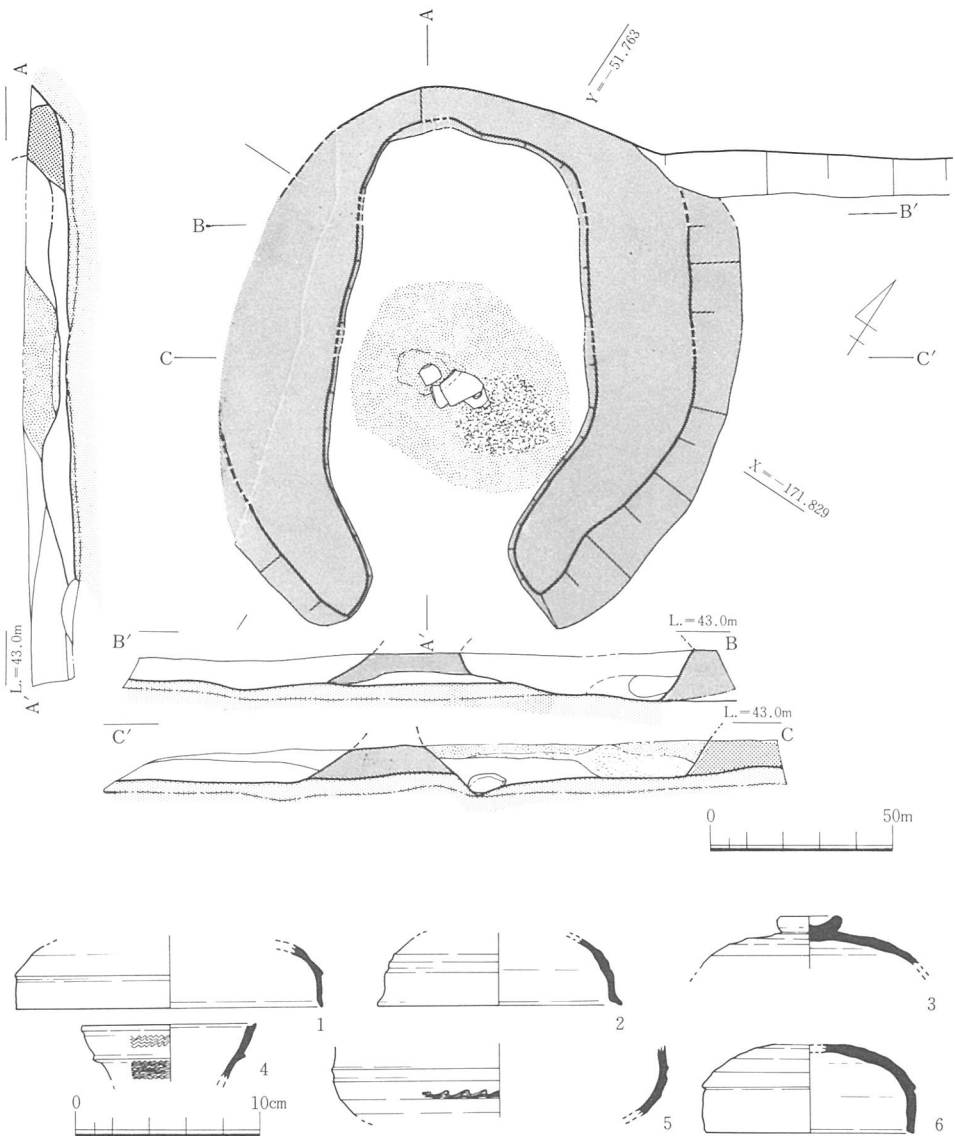


第26図 竪穴住居跡290平面・断面図

290—O D (第26・27図、図版七・八・三〇)

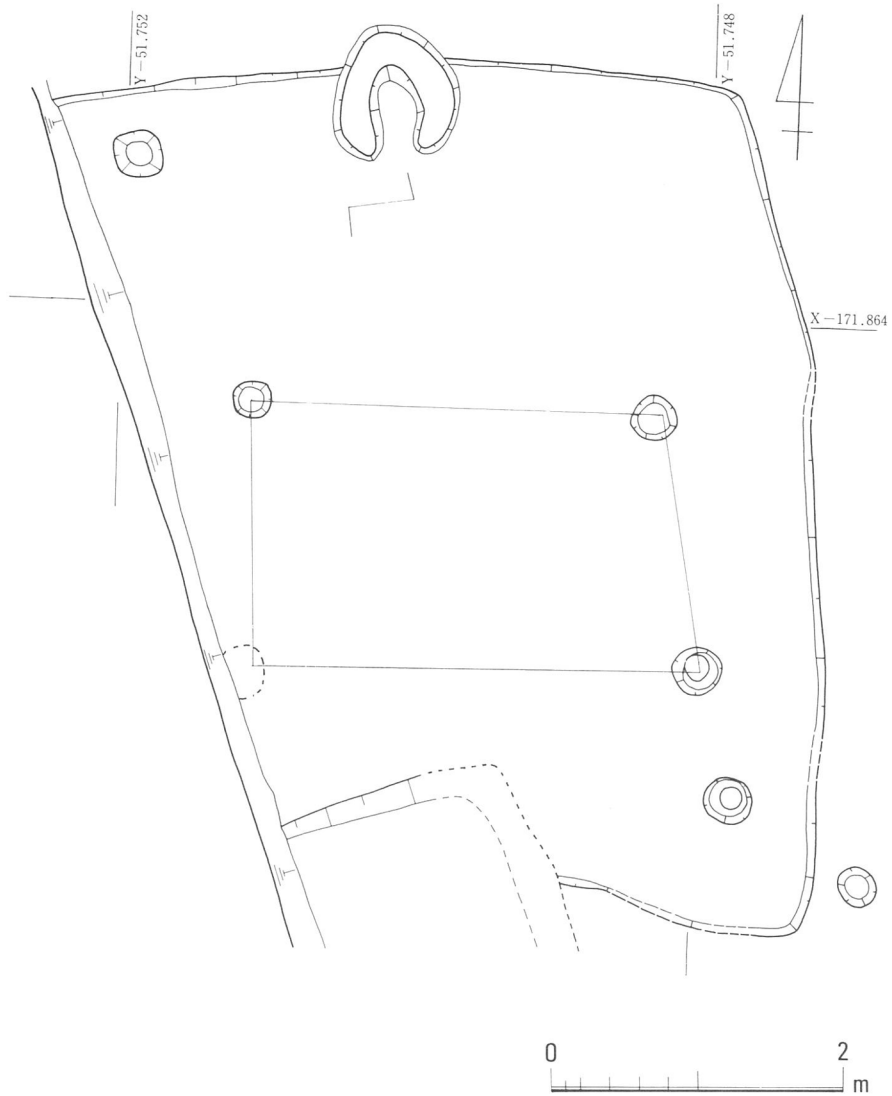
I 調査区、中央部西寄りの18H I 付近で検出された方形の竪穴住居跡である。北西コーナーが調査区外へ延びるが、擁壁2次調査の成果で、ほぼ全容をつかむことができた。主軸方向はN-78°-Wを示す。西側は側溝や試掘トレンチによって壊されており不明瞭ではあるが、その規模は東西約4.8~4.6m・南北約4.1mであり、床面積は約19.3m²であった。

竈は竪穴北西辺の中央部の設けられており、長さ約1.5m・幅約1.6mである。竈は中央部に拳大の河原石と土師器片と粘土をもって支脚としている。構造の特徴として、河原石の支脚を持つこと、竪穴住居跡平面プランの外側に約20cmほど張り出す点が挙げられる。遺存状態は悪かったが焼土炭の散布をみることから火口は竈中央部に設けられていたと思われる。竈の埋土は、炭層と焼土層がころうじて堆積しており、炭層の広がりや中央部から竈側に広がっていた。



第27図 竪穴住居跡290竈平面・断面図、出土遺物実測図

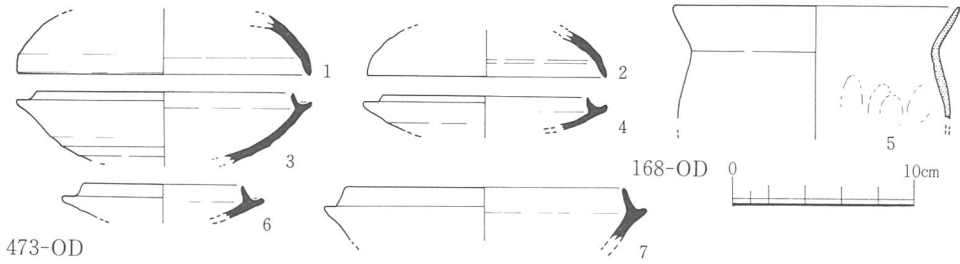
壁体の立ち上がりは、10～12cm前後と非常に浅く、後世に相当の削平を受けていると思われる。明確な壁溝や貯蔵穴を持たない。埋土は2層に分かれ、上層には浅黄色シルト層が、下層には焼土層の堆積が観察された。焼土を含む炭化層は部分的に厚い箇所が存在する。柱穴は住居内で6個検出したが4本柱で構成されていると考えられる。いずれも径40～35cm・深さ40～30cm前後を測り、柱痕径は18～14cm前後である。柱穴間の距離は2.1～1.5mを測る。



第28図 竪穴住居跡473平面図

473—O D (第28・29図、図版十二)

I 調査区南・西から18QM付近で検出された方形の竪穴住居跡である。住居跡は、中世の素掘溝や後世の建物柱穴による攪乱・削平が甚だしかったが、かろうじて検出されたものである。竪穴住居跡の西部分は調査区外に延びるが、規模は南北約5.8m・東西約4.7m以上、立ち上がり約5～3cmを計り、今回検出された竪穴住居跡中で最大規模の住居跡であった。南側の辺はいびつであるが、擁壁2次調査の結果、1122—O Dと切り合い関係に



第29図 竪穴住居跡473・168出土遺物実測図

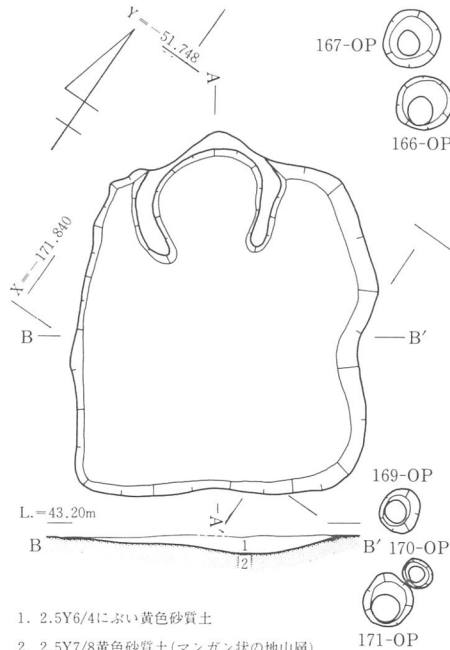
あることが確認された。

住居跡は北辺に造り付け竈や浅い1121—〇〇を伴っている。壁溝は検出されていない。柱穴は3個が確認でき、4本柱で構成されたと思われる。3つとも径32～30cm前後の円形で、深さ9～10cm前後を測る。柱痕の確認できたもので径18cmであった。

1121—〇〇は、擁壁2次調査において検出された長辺120cm・幅30cm・深さ6cm程の不定楕円形土坑であるが貯蔵穴などの可能性は少ない。

竈は、粘質土を持って逆「U」の字形に袖部を造っており、北辺で住居の外に延びる構造である。長さ90cm・深さ3cm前後を測るものである。

支脚部などは確認されなかったが、竈中央部を皿状に掘り窪めて焚き口としていたようで、炭を含んだ焼土面が検出された。焚き口焼土層も浅く、3cm前後が遺存していたのみであった。



1. 2.5Y6/4にぶい黄色砂質土
2. 2.5Y7/8黄色砂質土(マンガン状の地山層)

第30図 竪穴住居跡168平面・断面図

出土遺物として、ごく少量の須恵器杯、身の細片が埋土から出土した(第29図1～6)。これらの遺物からみて住居跡の時期は中村編年のII型式5・6段階に相当すると思われる。168—〇〇(第29～31図、図版十一・三〇)

I調査区中央部18KMで検出された方形の竪穴住居跡である。長辺約2.2m・短辺約2.1～2.0mを測り、長辺は北西(N-60°-E)に向ける。検出面から床面までの深さは15～10cm前後で、中央部が少し凹んでいる。

住居跡内には造り付け竈を東辺に持つが、柱穴・壁溝などの掘り込みは検出されなかった。

柱穴は検出できないが、周囲の南辺に沿って161・171・170—OPや166—OPを見い出せ、柱穴になる可能性がある。東隅と北の2本を欠くもの、これらが柱穴とすれば、平面プランの外側にあたるが柱穴の間は2.8m以上を測り、規模は径約30cm・深さ15cm程度である。

竈は、床面中央に周りを囲っていたと考えられ

る3個の拳大の石と少量の焼土のみ残すもので、その形態については明確にし得なかった。住居跡のほぼ中央に位置し、長さ0.9m・1.0mを計る。

床面は締りが悪く、貼床は一切認められなかった。遺物としては炉内から土師器甕が出土している他は埋土中より破片数点が検出されたのみである。炉内出土の土師器からみて本住居の時期も6世紀後半頃のものと思われる。

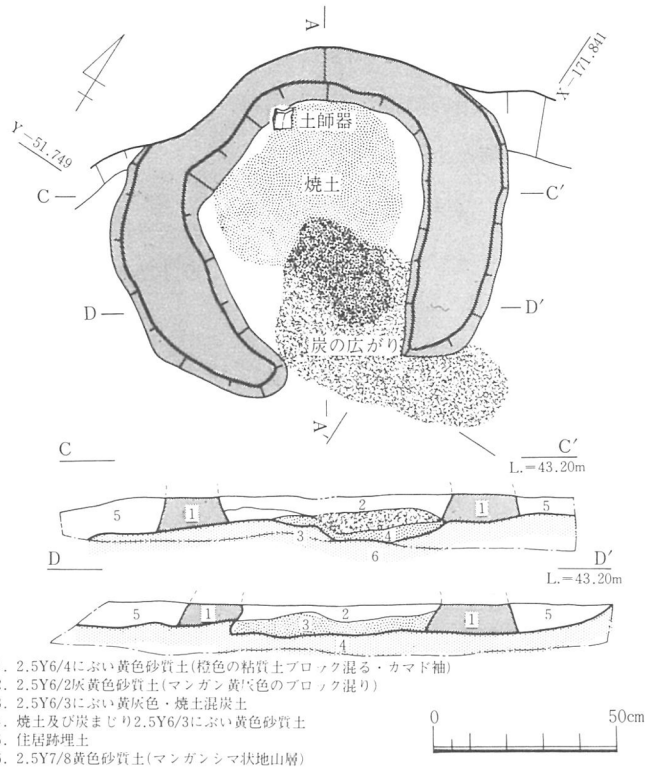
291—OD（第32・33図、図版八・九）

I調査区南東端の18RR・QR付近で、393—ODに切られて検出された方形の竪穴住居跡である。東と南の大半が調査区外に延びており、全容については不明である。

竪穴住居跡は地山を削り込んで作られているが、調査範囲内では竈・壁溝などの施設は全く検出されなかった。ただ、中央部の北よりで試掘トレンチを設けた際に、径4.5cm・深さ5cm程のピット(305—OP)を確認しており、柱穴になる可能性がある。

検出された住居跡の南北辺は3.5m、東西は2.6mを測る。深さは10~15cm前後である。

住居跡の上を中世の素掘溝が走り、攪乱されていたが、埋土は概ね灰褐色砂質土のマン



第31図 竪穴住居跡168竈平面・断面図

ガン混じりを基本とする。明確な貼床と思われる粘土層は検出されない。

遺物は、貼床上の南辺で須恵器高杯脚部の完形土器と土師器甕などが出土している。その他は、埋土から細片が出土したにすぎない。

393—OD (第32・33図、図版八・九)

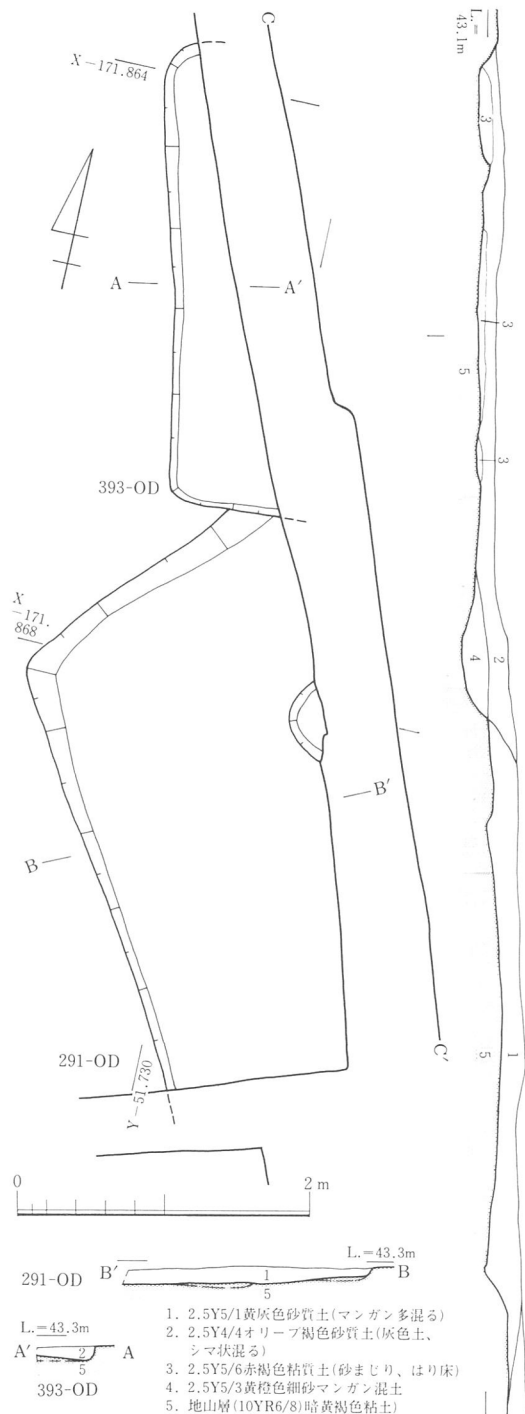
I 調査区南東端の18Q R付近に位置する方形の竪穴住居跡である。竪穴住居跡は、西辺と北辺・南辺の一部をそれぞれ検出したのみで、全容については、調査区外に延びていて不明である。

規模は、西辺で長さ3.2m、立ち上がりの深さ10cmを測る。南辺については擁壁2次調整の際にさらに延びているのを確認しており、2.0m以上を測る。深さについては、中世の段階でかなりの削平を受けているものと思われる。

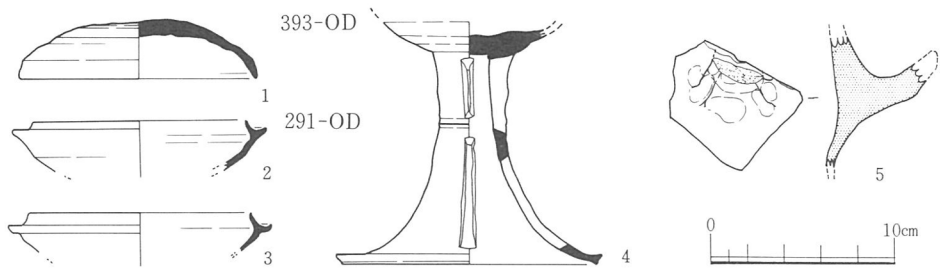
調査区内では、竈・柱穴・壁溝などは検出されない。西辺長3.2mは、291—ODなどの短辺の長さに等しく、北・南辺が長辺にあたると思われる、火所は北辺の可能性がある。

住居跡は、291—ODと切り合い関係にある。住居跡は地山を削り出しており、明確な貼床は確認できない。埋土は、おおむね灰色土である。

遺物として、北端床面上で須恵器杯蓋破片が出土した(第33図)。そのほかは、埋土から須恵器杯類の細片が6



第32図 竪穴住居跡291・393平面・断面図

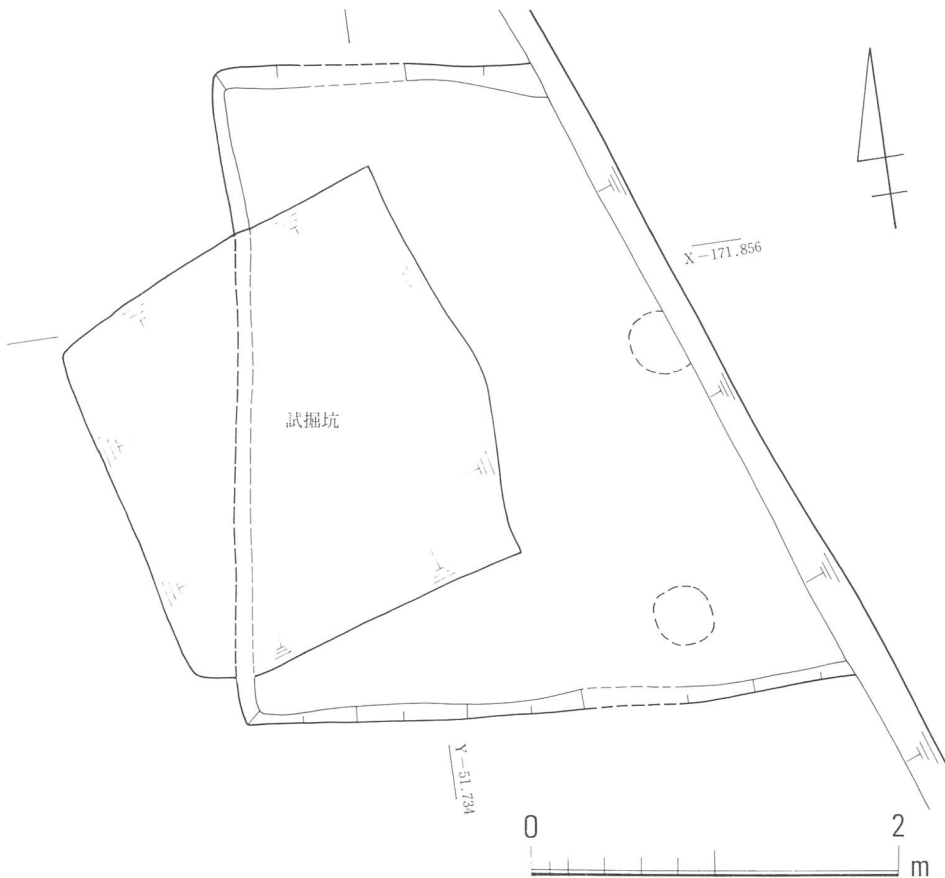


第33図 竪穴住居跡393・291出土遺物実測図

点出土したのみであった。1は、蓋であり、天井部はヘラケズリを施した後ナデによりかなり調整し直されており、II型式5・6段階に比定できるものである。

300—OD (第34・36図、図版十)

I 調査区南東部で検出した方形の竪穴住居跡である。東半は調査区外に延びているため



第34図 竪穴住居跡300平面図

その全体的な規模については不明である。南北3.1m、東西3.4m以上、深さ約0.1mを測る。現存部では竈等の施設について確認できていない。竪穴内のピットは擁壁2次調査の際に

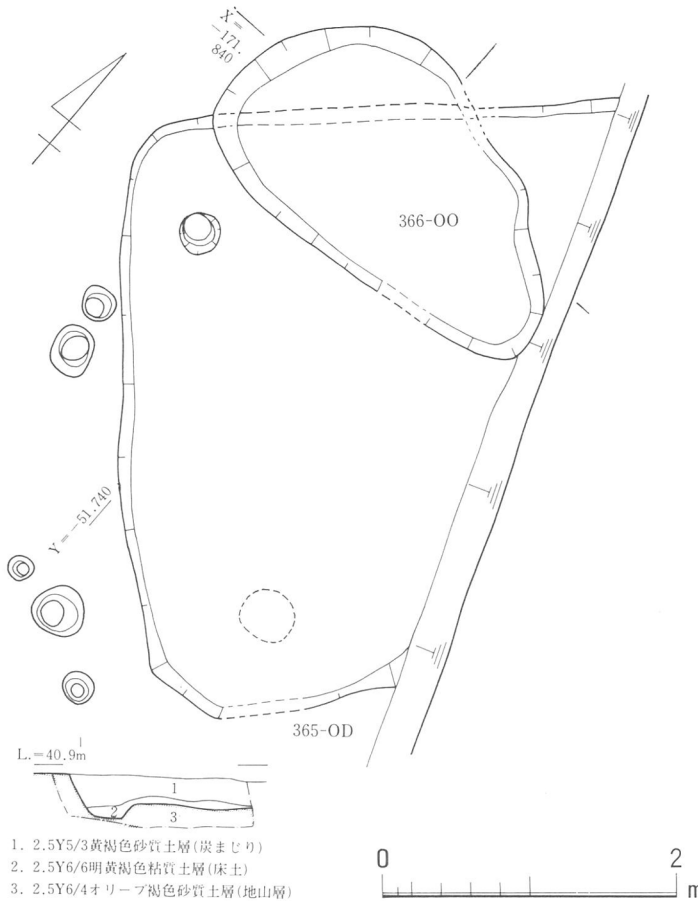
不確かながら2個確認している。いずれも竪穴内位置からみて本住居の主柱穴になるかどうか不明である。

出土遺物には須恵器杯、高杯脚部の小片がある。365—O D（第35・36図、図版十）

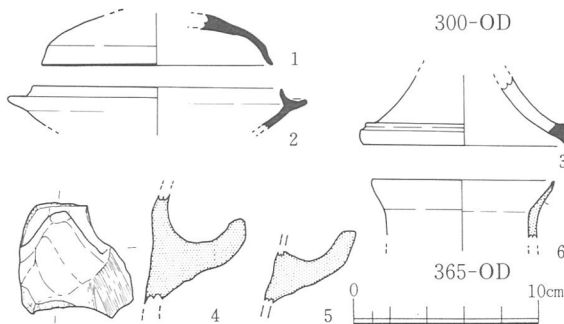
I 調査区南寄り東端で検出された方形の竪穴住居跡である。現存する2つの角はやや丸くなっている。東半は調査区外に延び、北辺は土坑に切られている。南北辺3.3m、東西辺2.6m以上、深さ約0.1mを測る。現状では竈の位置は不明である。東辺にあるのかも知れない。

竪穴内には不確かなものも含め、2個のピットが認められ、住居の柱を構成するものと思われる。柱穴の径は0.25m程度である。

住居内の出土遺物は少ないものの土師器甕、甌の把手が出土している。



第35図 竪穴住居跡365平面・断面図



第36図 竪穴住居跡300・365出土遺物実測図

掘立柱建物

上フジ遺跡においては、多数の柱穴を検出した。これらの柱穴からは数棟の掘立柱建物を復原することが可能である。しかし柱掘形（柱痕跡）からの出土遺物が微量であったため、それらの建物の時期を特定することは困難である。それでもわずかな遺物と埋土の様相から、第Ⅰ調査区の北半部から中央部にかけては古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけての柱穴が、南半部には中世の柱穴が集中し、また第Ⅱ調査区北半部には奈良時代と中世の柱穴が混在していることが推測される。

ここでは明確な掘立柱建物についてのみ記述を行いたい。

172—OB（第37図）

第1次調査時と擁壁2次調査時にⅠ調査区の中央西寄りのE18KK付近において検出した掘立柱建物である。

南西隅部分は調査区外となり、また一部未検出の柱掘形もあるが、桁行4間（5.7m）、梁間2間（3.8m）、面積23㎡の南北に長い掘立柱建物を復元できる。建物の主軸方向はほぼN-90°-Wである。

柱間は桁行がおよそ1.4m、梁間は推定では1.9mとなるが現存する東柱はそれとは大きくずれている。柱掘形は円形もしくは隅円方形を呈し径約0.4m、埋土は黄褐色系の砂質シルトで、全ての柱掘形で柱の痕跡を検出した。柱痕跡は径約0.16mである。

210—OB（第38図、図版十三）

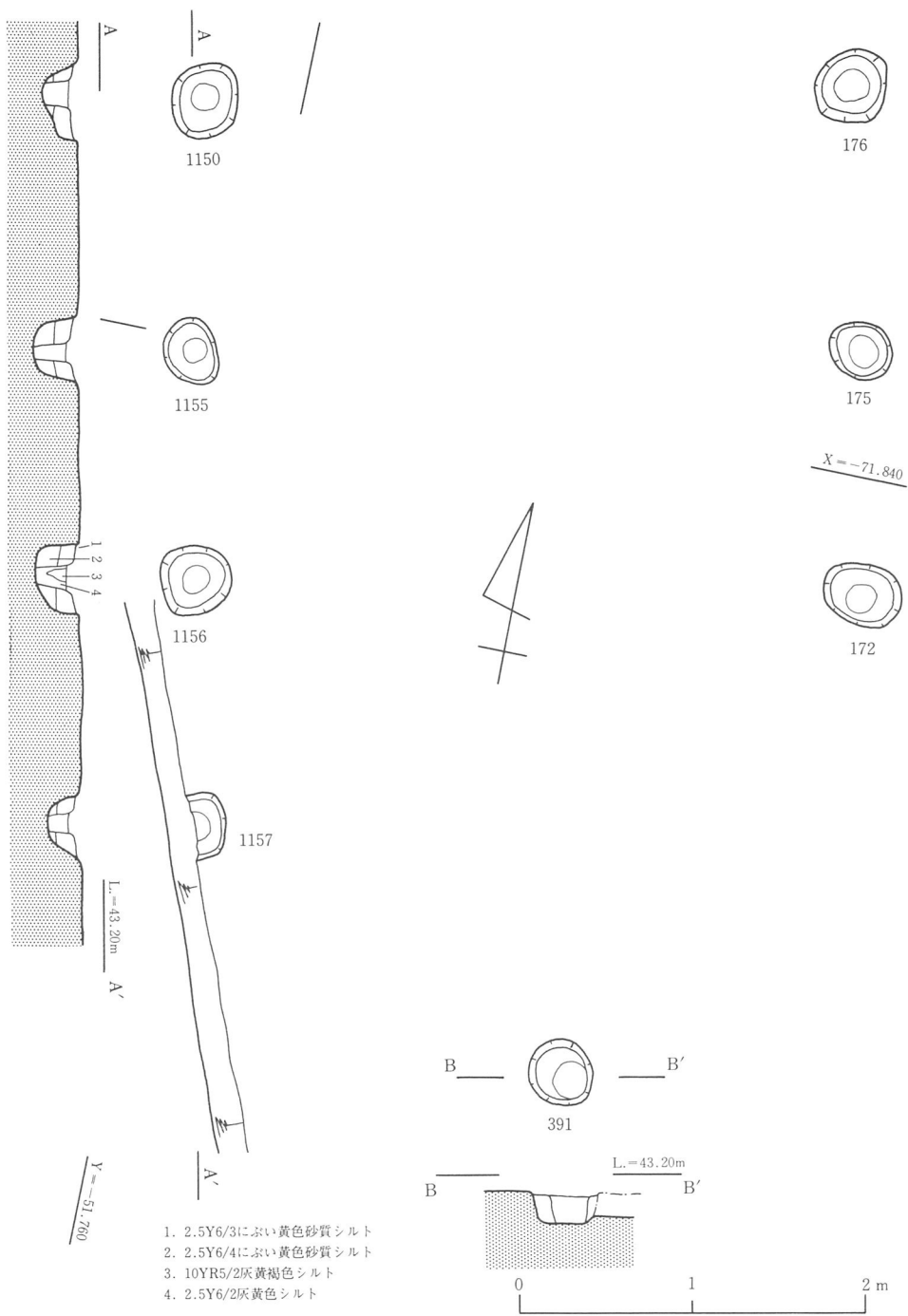
第1次調査時と擁壁調査時にⅠ調査区の中央西端E18AG付近において検出した掘立柱建物である。この付近には柱穴が集中しており、遺構間の切り合いも認められ、数時期にわたって掘立柱建物の建て替えが行われたと推測される。しかし今回の調査においてはその形跡を復元することはできなかった。

この掘立柱建物は西側が調査区外となり、検出できたのは桁行3間、梁間3間分だけで、全体の規模については明らかでない。桁行の検出長は5.7m、梁間検出長は3.4mを測る。主軸方向はN-47°-Eで他の建物とは大きく方向がずれる。

柱間は桁行で1.7~2.0m、梁間で1.1~1.2mと不揃いで、柱筋もやや乱れている。柱掘形はほぼ円形を呈し、径0.5~0.7mを測る。全ての柱穴で柱痕跡を検出した。径は0.15~0.18mを測る。

409—OB（第39図、図版十四）

第1次調査時にⅠ調査区の北端E13TF付近で検出した掘立柱建物である。436—OO



第37図 掘立柱建物172平面・断面図